山梨県東八代郡中道町
城越の敷石遺構

山梨県教育委員会
山梨大学教育学部歴史学教室

山梨県東八代郡中道町
城越の敷石遺構

山梨県教育委員会
山梨大学教育学部歴史学教室

序

最近わが国に於いて一つの課題となっているものに文化遺産の保存問題がある。就中道路の新設整備竝びに観光地の開拓による被害は各地に続出している。これを未然に防止する為には、これらの事業が着手される以前において遺跡の調査研究が必要である。山梨県においてもかような目的を以て、文化遺産の調査が進められている。

昭和43年6月山梨県教育委員会は東八代郡中道町城越の遺跡に就いての調査研究を山梨大学歴史学教室に委託された。そこで本教室では早速その調査を始めることとし、本学講師吉田章一郎氏及び山梨県文化財調査委員上野晴朗氏の指導協力を得て埋蔵文化財の発掘に着手した。この間、県教育委員会を始め、地元の中道町当局竝びに地主池谷久善氏の御援助により、予定通りに調査することができ、本報告書を作成することができたのである。今後もかかる研究調査を行ない、初期の目的を達成したいと考えている。この調査に当って協力をして下さつた前記の諸氏竝びに南山大学、上智大学、山梨郷土研究会の有志の諸協力に対し感謝の意を表するものである。

山梨大学教育学部歴史学教室

丸　山　国　雄

目　　次

1．はじめに……1

2．遺跡の位置……1

3．調査の経過……2

4．遺跡の概要……4

A．601地点……4

B．691地点……7

5．出土遺物……8

A．601地点出土土器……8

イ．敷石遺構内出土土器……9

ロ．Aトレンチと焼土付近出土土器……13

ハ．Bトレンチ出土土器……13

ニ．Cトレンチと特殊石組内出土土器……13

ホ．601地点出土土器の特色……18

B．691地点出土土器……23

C．石器……30

6．考察（敷石遺構について）……31

7．むすび……35

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡付近地形図 …… 2
第 2 図　601地点、691地点付近図 …… 3
第 3 図　601地点発掘トレンチ図 …… 4
第 4 図　601地点敷石遺構実測図 …… 6
第 5 図　出土遺物 …… 8
第 6 図　〃 …… 9
第 7 図　〃 …… 10
第 8 図　〃 …… 11
第 9 図　〃 …… 12
第 10 図　〃 …… 13
第 11 図　〃 …… 14
第 12 図　〃 …… 15
第 13 図　〃 …… 16
第 14 図　〃 …… 17
第 15 図　〃 …… 17
第 16 図　〃 …… 18
第 17 図　〃 …… 19
第 18 図　〃 …… 20
第 19 図　〃 …… 21
第 20 図　〃 …… 22
第 21 図　〃 …… 22
第 22 図　〃 …… 24
第 23 図　〃 …… 25
第 24 図　〃 …… 26
第 25 図　〃 …… 27
第 26 図　〃 …… 28
第 27 図　〃 …… 29
第 28 図　〃 …… 30
第 29 図　〃 …… 31

図 版 目 次

図 版 Ⅰ　1．御坂山脈と遺跡遠望

2．宿の部落より遺跡遠望

3．遺　　跡

図 版 Ⅱ　1．Aトレンチ、壁石の出現

2．敷石遺構壁石

3．炉　　址

図 版 Ⅲ　1．敷石遺構敷石

2．〃　　炉址

3．敷石遺構外土器出土状況

図 版 Ⅳ　1．敷石遺構全景

2．　　〃

3．　　〃

図 版 Ⅴ　1．敷石遺構北東部の石組

2．敷石遺構と石組

3．敷石遺構の北東部の塊石

図 版 Ⅵ　1．691　地　点

2．　　〃

3．同地点グリッド

図 版 Ⅶ，Ⅷ，Ⅸ，Ⅹ，　遺　物

山梨県東八代郡中道町城越の敷石遺構

1. はじめに

山梨大学教育学部歴史学教室では、昭和43年8月20日から同8月31日にいたる間、標記の縄文文化時代の遺跡を発掘調査した。これは昭和43年度における山梨県の埋蔵文化財の調査が県より山梨大学に委託されたことによるものである。

調査は講師吉田章一郎が中心となり、山梨県文化財調査委員上野晴朗が参加し、発掘は主として、山梨大学の歴史学専攻の学生および卒業生諸君の手により行なわれた。この間、県関係では社会教育課長中楯仁兵、同文化係長波木井市郎、地元では中道町長、同教育長をはじめとする町当局、郷土研究家渡辺敏雄氏、地主池谷久善の諸氏より絶大な援助をうけた。とくに池谷氏は我々の希望をかなえて、所有地の発掘を承諾され、さらには宿舎まで提供していただいた。記して感謝の意を表する次第である。なお発掘には山梨大学の学生諸君の外に、南山大学人類学科の学生、上智大学史学科卒業生、山梨郷土研究会の会員諸氏の応援があった。また山梨大学の歴史学関係各教官・職員の援助も忘れてはならないものがある。とくに事務的な仕事を引き受けていただいた内田由起子氏、連日泊まりこみで発掘に従事され、貴重な助言をあたえられた菊池英夫助教授に感謝の意を述べておきたい。

2. 遺跡の位置

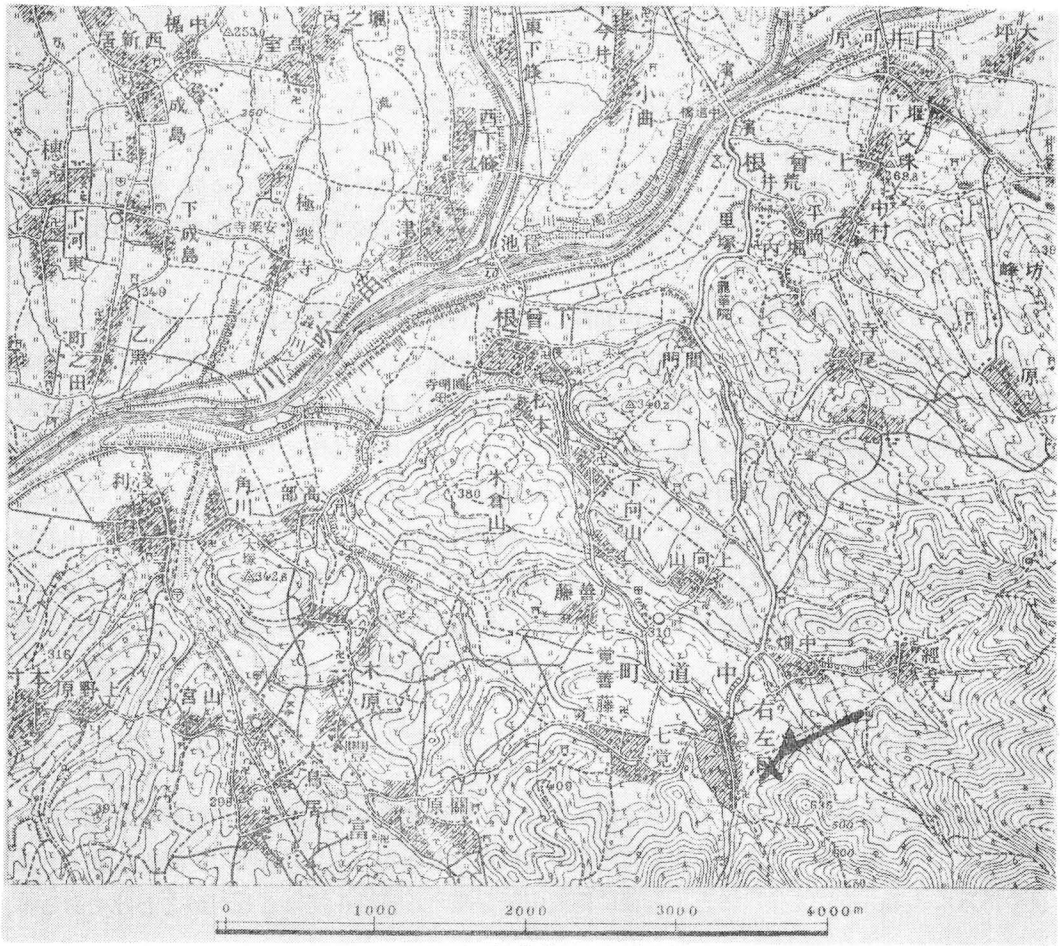
甲府の市街地から荒川に沿って真っ直ぐ南へ進むと、甲府盆地の端を北東から南西の方向に流れる笛吹川にぶつかる。そこはちょうど荒川と笛吹川の合流点でもある。ここで笛吹川を渡ると道は中道町下曽根の部落に入る。そこを抜けると、背後に御坂山脈を擁する曽根丘陵にさしかかるわけであるが、この道路の東側、丘陵の先端部に古くから有名な銚子塚古墳がある。

曽根丘陵は、その範囲をはっきりと限定することはむずかしいが、一応西は市川大門町と三珠町の境を流れる芦川から東は八代町の浅川に至る間を考えてみると、東西約15km、南北の幅約4kmにわたって、笛吹川の南岸に沿って連なる丘陵であるが、標高大体360m内外を示している。高いところは、西より大塚山（342.6m）、米倉山（380m）、坊ケ峰（392.4m）などがみられるが、笛吹川の岸に向かっては、かなりの傾斜を示しており、北の方御坂山脈の麓には割合にゆるやかに接する所謂「ベンチ型地型」とよばれる地形を示している（図版Ⅰの1）註1。

丘陵には御坂山脈から流れる水が、いくつかの川をつくり、幅のせまい谷を形成しているが、その一つに滝戸川とよばれるものがある。甲府盆地から南へ山越えして富士山麓へ通ずるいくつかの古い道の一つに中道とよばれるものがある。さきに述べた甲府の市街から真っ直ぐ南へのびる道である。この道は滝戸川の谷をのぼり、右左口峠をこえていくのであるが、峠の登り口に古い宿場の面影をとどめる部落がある。名を宿といい、下の方から下宿、中宿、上宿となっているが、上宿のはずれに近く池谷久善氏の宅がある。

遺跡はこのあたりから東の方へ、一面の桑畑を抜けて、小さい谷を横切った東側の台地の上にある（図版Ⅰ—2）。ここは右左口峠の南斜面にある城山（535m）の麓にあたり、ゆるやかに北の方へ下って

いく台地の縁辺に近いところで、北の方には甲府盆地から甲府市街を、さらに遠く八ケ岳をのぞみ、西方には南アルプスの嶺々を、東には東京都、埼玉県の境を接する山々が望まれる眺望のよいところである。遺跡の標高は361mである。



第 1 図　遺跡付近地形図

3. 調査の経過

昭和43年８月20日、午後１時、大学を出発し現地に至り、宿舎の準備などを行ない、午後４時より中道町長、教育長をはじめ関係者集合の上、大学側より丸山国雄教授も出席して調査の発会式を行ない、翌８月21日より調査を開始した。

遺跡の位置はさきに述べた通りであるが、地籍は山梨県東八代郡中道町 城越601番地である。(第１図) 現在は野菜畑になっている。この地点は前年に池谷氏が牛旁を掘るために、鍬を深くいれた時に、ほぼ完形の土器を発見し、とりあげた所である。この土器は接合されて現在池谷氏宅に保存されている。(第９図)

この土器をとりあげた時に、付近に多くの石があり、しかも、それが平らに敷かれていたが、二三の石を抜いた後にまた埋めもどしたと池谷氏は語っていた。このことから、何か石造遺構があるのではないかと考えられたのが、この遺跡の調査を計画したきっかけの一つであった。

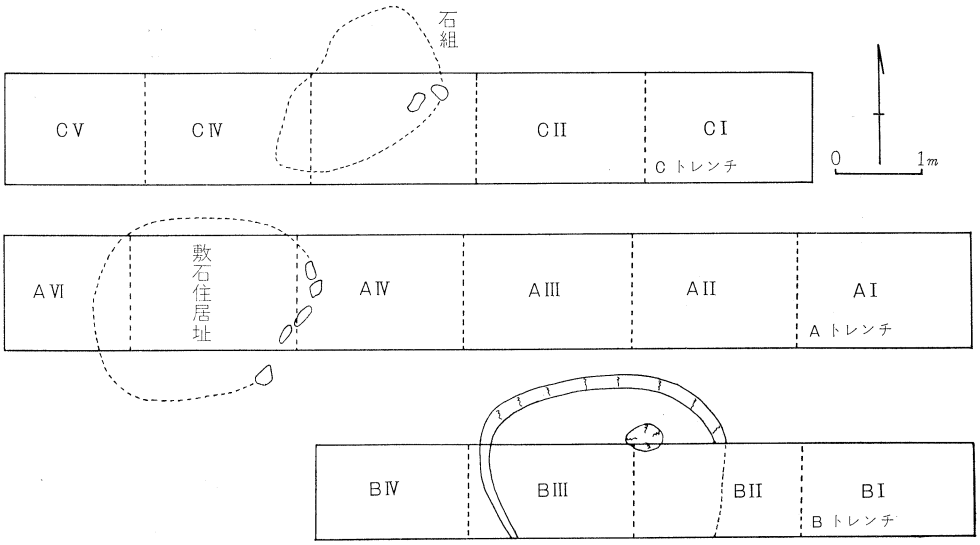
我々はそれと思われる地点を中心に、東西方向に長さ６m～８m、幅１m～1.5mのトレンチを50cmの間隔をあけて、３本掘ることにした。周囲は桑畑になっており、そこまで手を伸ばすことは不可能で

第 2 図　601地点、691地点付近図

あり、野菜畑に力を集中することを考え、一応この3本のトレンチで野菜畑全体をカバーできると考えたのである（図版Ⅰ—3）。主トレンチをAとし、その南側のものをBとし、北側のものをCとした（第3図）。

8月22日からは、この地点から南へ200mばかり離れたところ、すなわち城越691番地にも手をつけることにした。（第2図）ここにも土器の散布がみられ、また当時農作物をつくっていなかったので、発掘地点に選んだのである。ここは東西20m、南北15mばかりあったので、2m四方のグリッド方式により発掘を行なうことにした。

以後8月29日まで両地点の発掘を実施したが、途中雨による中断があったにもかかわらず、無事終了し、8月30日には埋めもどしを完了し、調査を終わることが出来た。そして601地点で敷石住居址と思われる敷石遺構が発見され、池谷氏の深い理解によって、保存することが出来、一般の人々の見学の資に供することが出来たのは当事者としてまことに感謝に堪えないところである。現在は一応埋めもどされているが、必要とあれば掘り出されて復元出来るようになっていると聞いている。



第 3 図　601地点発掘トレンチ図

4. 遺跡の概要

601 地点

各トレンチを東の方からⅠ、Ⅱ、Ⅲ……と2m毎に区分した（第3図）。このうち、Aトレンチの南側のセクションの所見では、AⅠ区あたりでは表土下30cm～40cmばかりで、耕作土の下に褐色土層があらわれてくるが、BⅡ区、BⅢ区になると、それが表土下60cmばかりのところであらわれる様になる。このあたりにくぼみがあるらしいことを示すもので、又その範囲が大体円形をなす様に思われたが、南側は桑畑になっているので掘ることが出来なかったのは残念である。一応住居址ではないかと推測されるが、推定径約2.7mであるが、発掘部分には炉址は発見出来なかった。

AⅣ区では表土下40cmばかりのところから細長い石がならんでいるのが発見された（図版Ⅱ—1）。これらの石は僅かに環状をなして連なっていたので、あるいは環状列石の一部分かも知れないと考えられた。この列石の内側の土を除いていくと、そこには平たい石を一面に敷いた面があらわれた（図版Ⅲ—1）。環状の列石の上面と平たい石の面との差は約15cmばかりであった。この列石の大きさは長さ20cm

～25cmばかりであり、敷かれた石の大きさは大きいもので80cm×60cmである。大きな石の間に小さな石が敷かれているが、石の厚さは平たくて、いずれも4cm～6cmばかりである（図版Ⅲ－1）。

この敷石の北の部分に長さ50cmばかりの石を組合わせた方形のプランの石組があった。この石組の南側の一部分が欠けている様にみえるが（図版Ⅱ－3）、掘りあげてみると、上部の一部分がないだけで、四角形を呈することが分かった。大きさは内法で東西30cm、南北40cmである。石組のなかには上部に黒褐色のサラサラした土があり、その下に焼土がみられた。石組の上面から焼土まで深さ20cmで、焼土の厚さ5cm、その下は黄褐色の土層となっている。この黄褐色の土層はおそらくローム層であろうと思われる。炉址であることは間違いないであろう（図版Ⅲ－2）。

この炉址の北の部分には敷石が見当たらない。この部分の土は普通の住居址の床面の如く硬いというほどでもない。石は始めからなかったか、あるいは後になって抜かれたものかの判断はむずかしいところである。ただ従来発見された敷石住居址のなかには一部分に石の欠除している例も報告されているので、この場合もあるいは無かったかとも考えられる。ただ炉の南の部分で石のないのは池谷氏が掘り出したのに間違いなく、保管されてあった板石をもとにもどして復元しておいた。

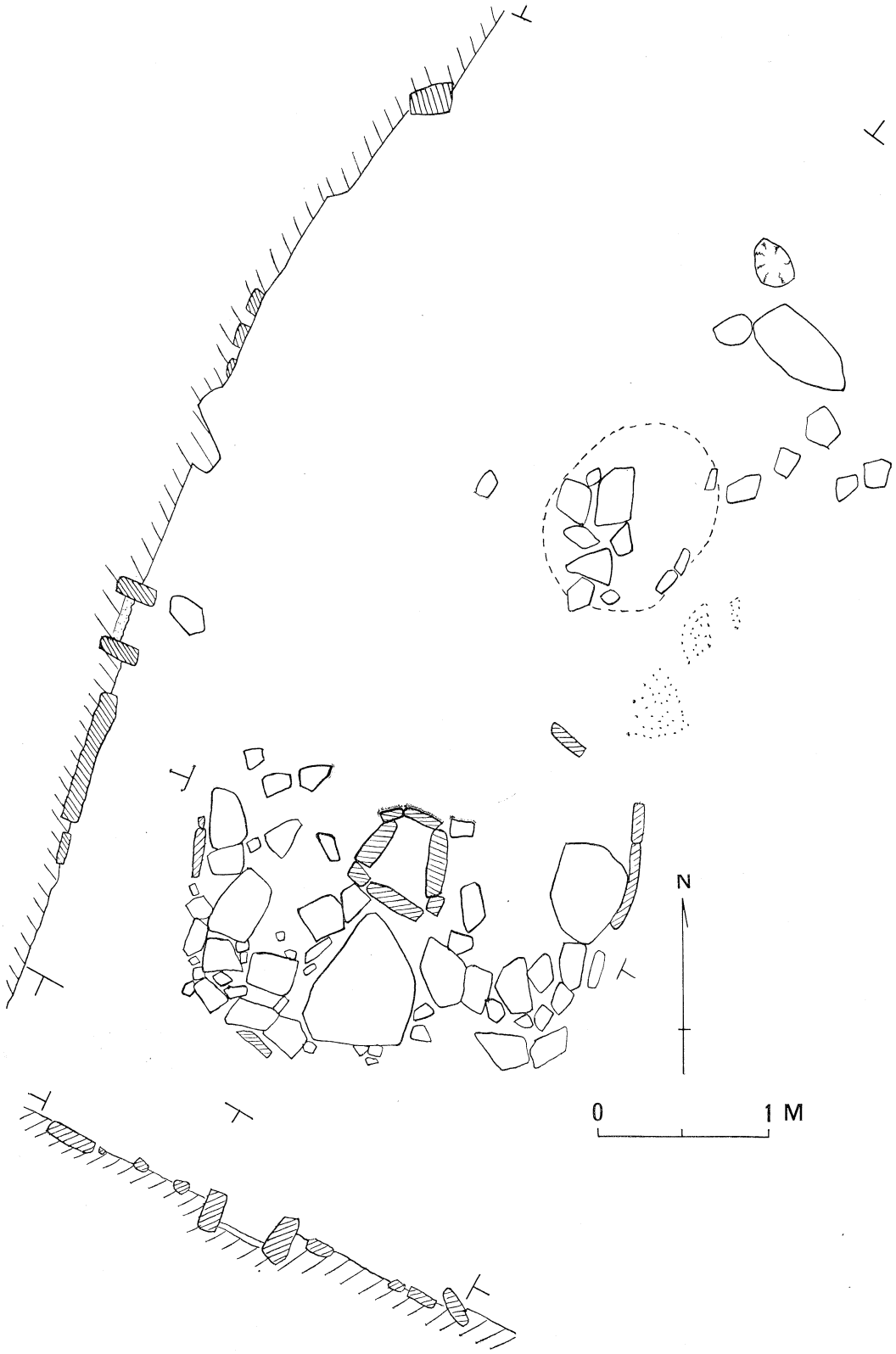
縁石、炉址、敷石の状態から復元してみると、この敷石遺構は円形、もしくは楕円形で、その径は2.6mばかりと思われる。柱穴については明確に出来なかった（図版Ⅳ1～3）。

この敷石遺構の炉址から東北の方へ3mばかり離れたところに、別の石組が発見された。この石組追求のためCトレンチの拡張をしたのであるが、石組は環状を呈し、径は80cmで大きな炉址のごとくであった（図版Ⅴ1、2）。しかし炉にしては大きすぎるし、中には焼土も発見されず、また石組の組み方も雑で、おそらく炉址ではないということになった。この石組のレベルは敷石遺構より15cm～20cmひくい位置にある。

この石組と敷石遺構の中間に、石のかたまっている部分が発見された（図版Ⅴ－3）。この石群はちょうど穴の中へ石が落ちこんだ様な状態を呈していた。この石群の上面は前述の石組よりさらにひくくなっていた。そして石群の最下位は石組の基部より40cmばかり下になっていた。

つぎにこの石群と敷石遺構の中間にあって敷石遺構の縁石に近いところに焼土のかたまりがあった。かなりよく焼けており、この付近から縄文土器の破片も出土している。後世の焚火の跡ではないかという意見もあったが、その焼け方から考えて、新しいものではなく、やはり古い時代のものではないかということになった。そして最初この焼土の東側に住居の壁面の如きものがみられたので、あるいは土師器を有する住居のカマドかも知れないと考えてみたのであるが、土師器の破片はひとつも発見されず、壁面と考えたものも発掘が進むにつれて、そうではないと判断されたので、これはやはり縄文時代のものであろうということになった。ただこの焼土と同一レベルの付近の土が普通縄文時代の住居址にみられるように硬い状態ではなかったので住居の床面とは考えにくいので、そこに一抹の疑問は残るのであるが。

さらに前記の石群の下約15cmのところからまた焼土が発見されたが、これは今まで述べた焼土とは別のものである。そしてこの焼土の性格をたしかめるため、南北方向にその面を拡大し、さらにトレンチの断面で観察したのであるが、住居の床面を思わせるような変化をとらえることは出来なかった。時間の関係で、この面をさらに拡大することは出来なかったが、前記の石群はこの焼土の面からすれば、浮いた存在なので、一応関係はないものと考えられる。また床面は確認出来なかったが、この焼土を中心に住居址があったと考えても、必ずしも間違っているとは思われない。



第 4 図　601地点敷石遺構実測図

一方この石群、あるいはその東北方の炉址状石組を前述の敷石遺構の造り出し部ではないかという考え方もあるが、レベルが違うこと、中間に石のない部分があることなどからみて、結びつけて考えるだけの要素にやや欠けるものがあると考えられる。ただこの石のない部分は、耕作などで攪乱されて石がなくなったと考えられないこともない。しかしそうすればその時に焼土なども攪乱される位まで掘られることになるので、このようなことも考えにくい。ここでは一応別の施設と考えておきたい（図版Ⅴ—2）（第4図）。

以上のような遺跡の状態を整理してみると

イ、今回発見された平たい板石を敷いた遺構は炉址を有しており、住居址としての要素がきわめて多い。縁辺の環状の石組と敷石との関係を考えれば、この遺構は竪穴式というより平地式に近いものではないかと思われる。

ロ、この敷石遺構の北側にあってほぼ同じレベルにあった焼土は炉址であると考えられる。それを伴う住居ははっきりしなかったが、あるいは敷石遺構をつくる時に破壊されてしまったのであろうか。これについては、また反対に敷石遺構が廃棄された後に住居が営まれ、その期間が短かかったために、床面はあまり硬くならず、また壁面は耕作などで破壊されてしまったのではないかという考え方もできるであろう。この点では決め手になるものはない。ただ出土した遺物の上から考えてみると、図版Ⅲ—3にみられるように敷石住居外の裏返しになった土器が焼土の伴う床面に属するものと考えれば、若しこの住居が敷石遺構より後のものとすると、その床面の真ん中に壁石があらわれることになり、住みにくくなるのではないだろうか。おそらく取り除かれることになるだろうと思われるので、敷石住居址の方が後につくられたと考える方が妥当のような気がするのである。

ハ、敷石遺構の北側にある石組は二つとも敷石遺構とは別のものであろう。これらを一つの敷石遺構のこわされたものとする考え方もあるが、前記の敷石遺構の石に比べると、板石ではなくて、塊石であることなどから、これらの石組は果たして南側の敷石遺構と同じ性質のものかどうかはっきりということはできない。

ニ、この石組の下の焼土は、はっきりとはいえないが、別の住居址のものであろうと推測される。

ホ、池谷氏の発見した土器の位置は、結局明確にさせることは出来なかった。発見当時の話を総合すると、石のあった場所と少し離れているようであり、また石の発見された面よりも深いところにあったらしく、どうも敷石住居址とは直接的に結びつくようなところにあったとは思われない。そしてその位置を推測してみると、どうもBⅡ、BⅢのあたりに発見されたくぼみの方に関係あるように思われてくるのである。

ヘ、以上の様なことから、この601地点においては、五つの住居址らしいものが想定されるのであるが、出土する土器との関係については、遺跡がかなり荒らされているので、層位的に明らかにすることはむずかしかったといわざるを得ぬ。

691地点（図版Ⅵ—1～3）

601地点から南へ200mばかり離れたところに691地点がある。標高は601地点よりごく僅か高いようであるが、このあたりから南へいくと、西の方から入りこんでいる谷の傾斜面にさしかかるようになる（第2図）。

グリッド方式により畑地全面に手をつけたが、土器破片の出土は少なかった。大体地表下30cm～40cmのところから地山と思われる赤褐色土層があらわれるという状態であった。グリッドは2m四方で、南

から北へA、B、C、D……、西から東へ1、2、3……としたがA7区において表土下40cmで焼土らしきものを発見し、その面をひろげていったが、住居址であるという確認は出来なかった。C5、C4、B5、B4においても、土器の出土する面を追求して、かすかなくぼみがあることが認められたが、住居址とは判断出来なかった。D2、C2では表土下30cm～40cmで黄褐色土層があり、その下10cm位で黒褐色土層がみられ、この層から土器の出土があった。

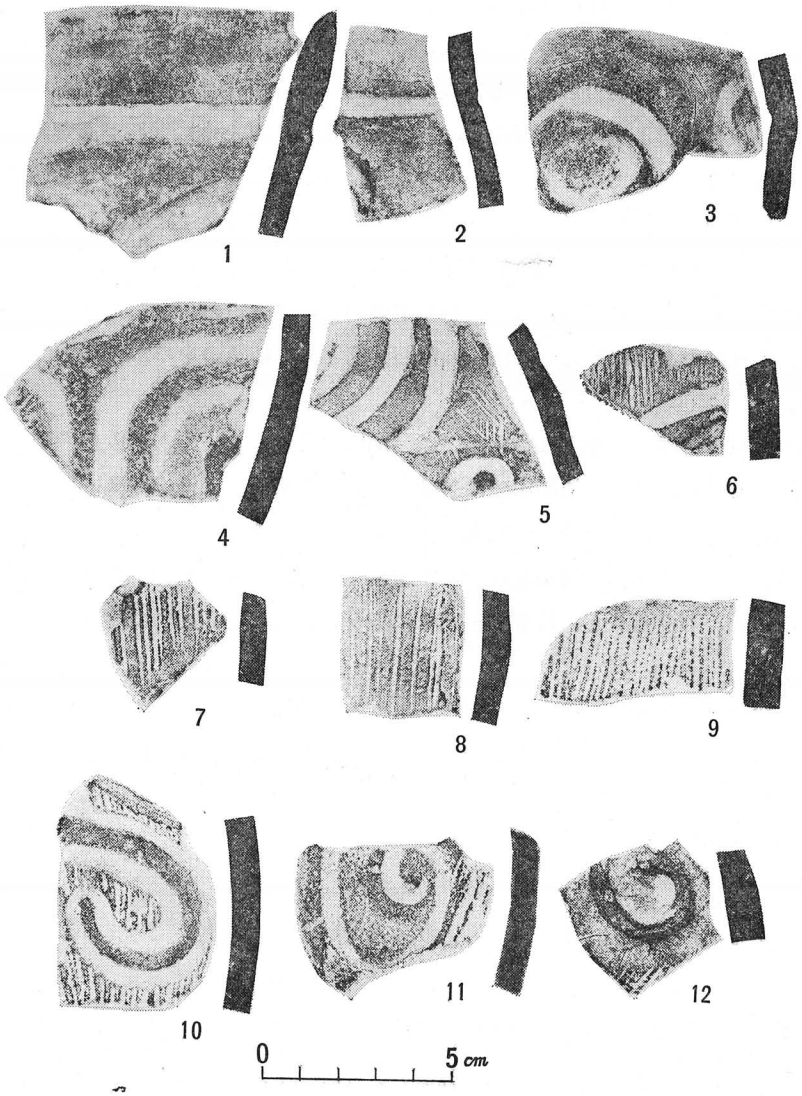
結局691地点においては、炉址と思われるものが、畑の東南の隅に発見された以外は一面に土器の出土はあったが、その量は少なく、遺跡の性格は明らかにすることは出来なかった。

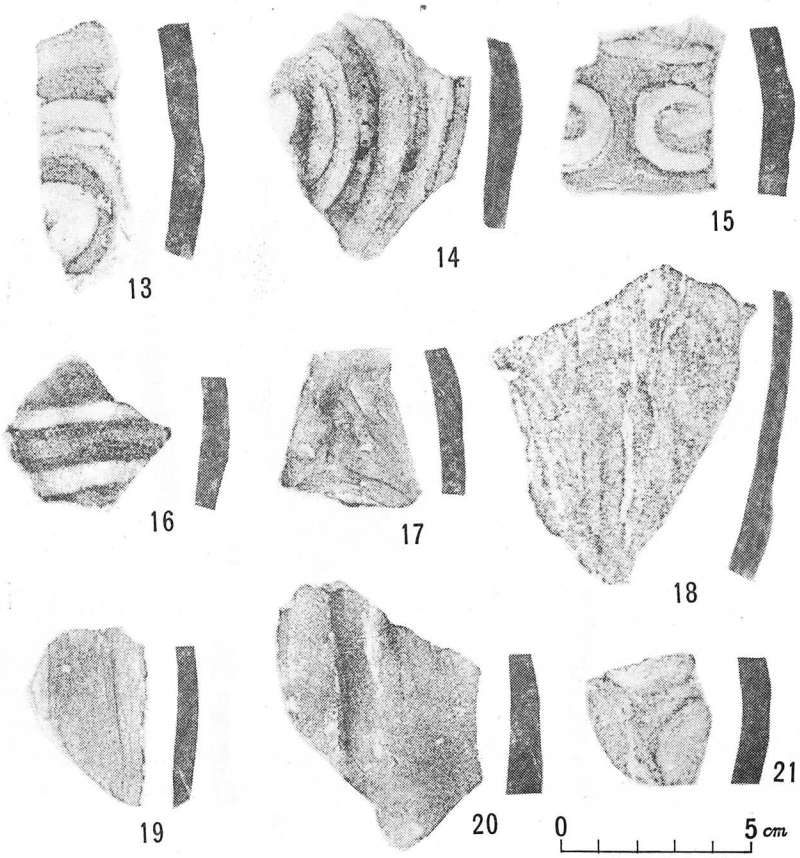
5. 出土遺物

今回発見された遺物は土器と石器で、自然遺物、その他は認められなかった。

A. 601地点出土土器

601地点出土の土器はA、B、Cの各トレンチ出土のものと、敷石住居址内出土のものに分けられるが、資料整理の結果は、主体は加曽利E Ⅱ式併行のものであるといえる。前述の如く複合すると思われ





第 6 図

る住居址、または層位による土器型式の差異は微妙なものがあるといわざるを得ない。

イ．敷石遺構内出土土器

敷石遺構内出土のものは文様を構成する要素によって、次の５群に分類することが出来た。

第１群土器（第５図、第６図１～14）

この群は肉彫的な渦巻文と条線文の組合わせから成り、口縁は平縁で無文であり、その下に横走する幅広い沈線を一条、もしくは二条配している。焼成は暗褐色、灰褐色で砂粒などの夾雑物の混入が多い。器形は外反する深鉢型もしくは甕型土器で、この型式は関東の加曽利ＥⅡ式併行のものといえよう。

第２群土器（第６図15～16）

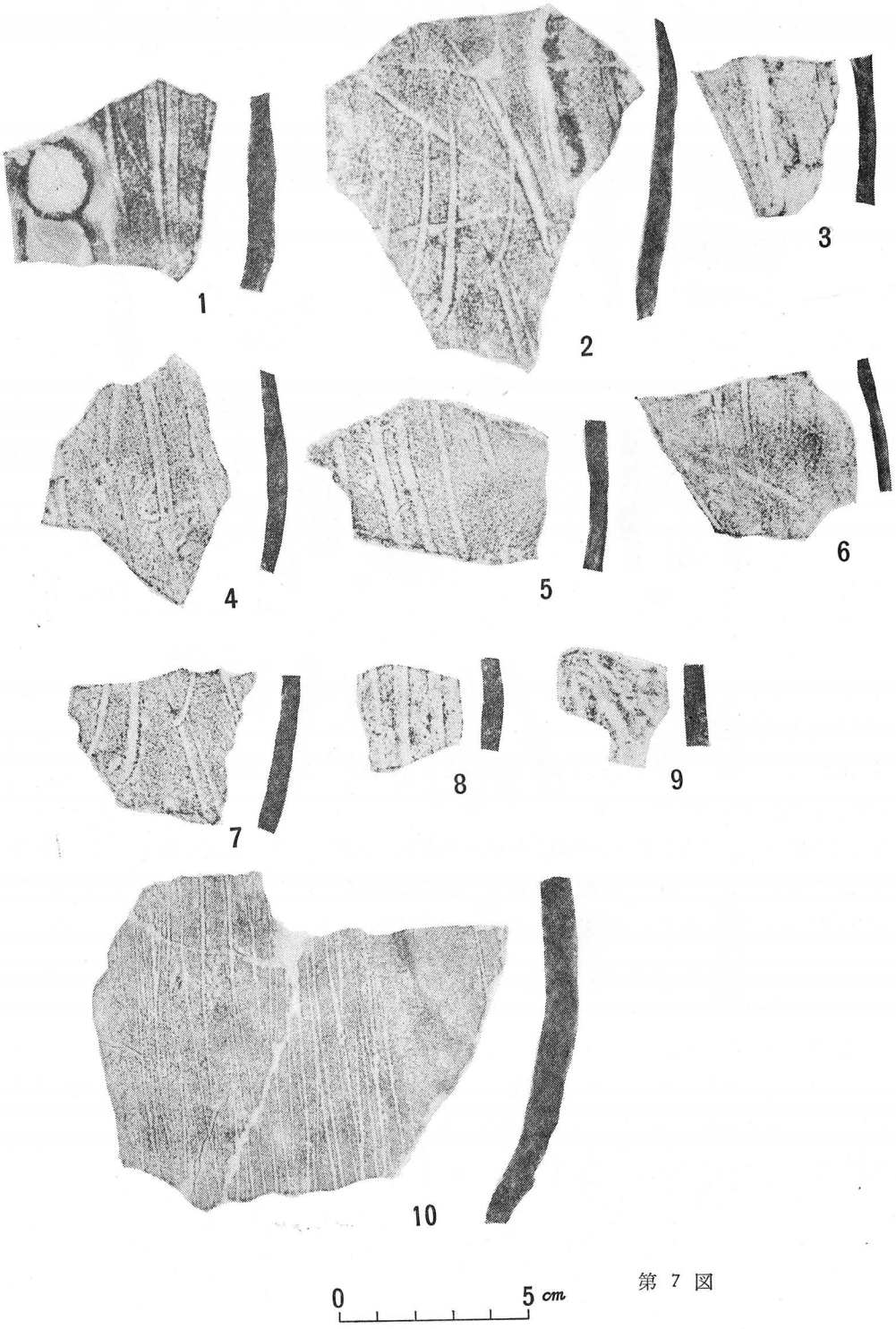
文様が沈線文だけによる構成で、15は口辺部の装飾と思われるが、Ｘ字文様の連続によって構成されている。器厚は５㎜内外と薄く、焼成は堅緻で、雲母の混入がみられる。型式的には堀之内Ⅰ式に入ると思われるが、加曽利Ｅ式の要素もみとめられる。

第３群土器（第６図17～21）

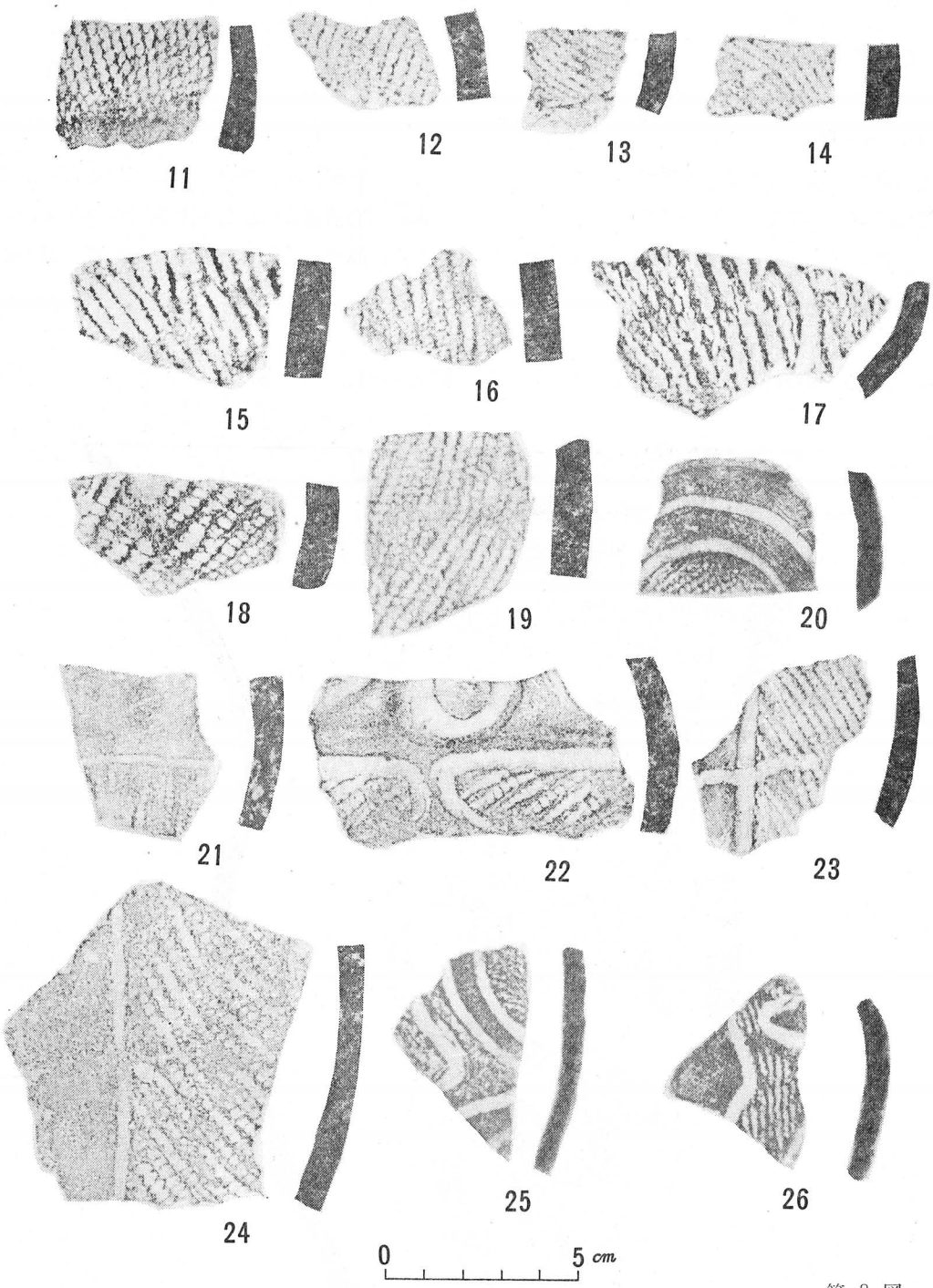
無文でヘラによる器面調整がよくされているが、退化した隆起の懸垂文がわずかに認められる。この類は褐色もしくは灰褐色で雲母と砂粒の混入がみられる。

第4群土器

この群は一類と二類に分けられる。



第 7 図



第 8 図

第一類（第7図1～9）

器の表面を櫛目というより引掻文や擦痕文で全面をあしらった土器で、器厚は4㎜前後と薄く、焼成は灰褐色を呈し、器壁内部に黒い炭化物が付着している土器片もみられた。型式的には堀之内Ⅰ式に属するであろう。

第二類（第7図10）

条線文土器で、区画した隆線文がたれ下がった様子がわずかに認められる。焼成は褐色を呈し堅緻で

ある。

第5群土器

これも一類と二類に分けられる。

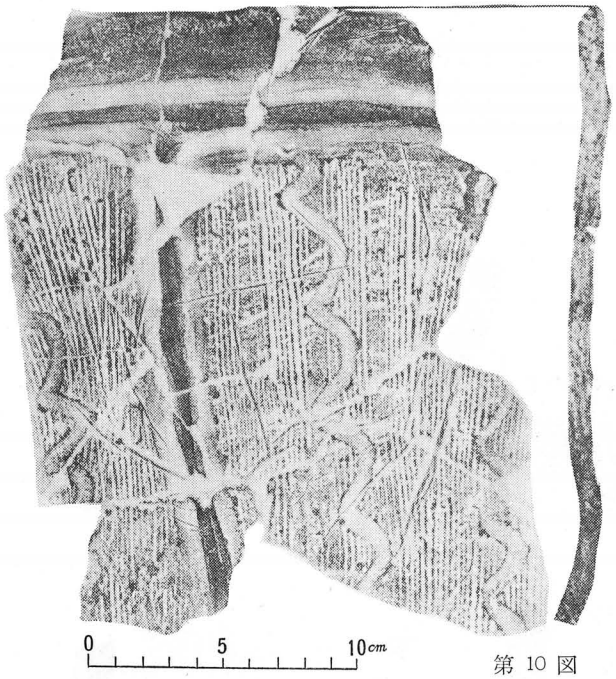
第一類（第8図17、20～26）

文様が縄文と沈線文によって構成された土器である。このうち20、25、26はとくに器厚が薄く、焼成は堅緻で暗褐色を呈しており、磨消縄文がとくに顕著である。磨消縄文は加曽利EⅡ式からみられるというが、この類はとくに精製されたものであり、堀之内Ⅰ式に属すると思われる。ただし17、21～24は焼成が悪く器厚は厚く、前者とは若干違った面がある。

第二類（第8図11～16、18、19）

文様が縄文のみの精製土器でほとんどが単節の斜行縄文をほどこしてある。

第 9 図



第 10 図

ロ、Aトレンチと焼土付近出土土器

敷石遺構の北側に隣接するところから焼土を伴う床面らしきものが認められたが、その床面上に第10図の土器が裏返しになってあった。敷石遺構の床面より15cmばかり上層である。土器は口縁部がみられたが、それは平縁で、深鉢型らしい。器厚は1cm～1.5cmであり、口辺部は外反せず、やや内彎し、外縁のやや下がったところに横走する沈線文があり、そこから胴部に向かって退化した隆起線がたれ下がっている。胴部の地文は櫛状施文具を使った条線文で、隆起線によって区画されたなかを、二条の沈線による蛇行状文がたれ下がっている。焼成はやや粗雑で、色は褐色であるが型式は加曽利E Ⅱ式に属するといえよう。

地主の池谷氏が発見した深鉢型土器はこの類に属すると思われる（第9図）。この土器は略々完形で高さ39.4cm、口径32.4cm、底部の径7.2cm、器厚1cm内外である。口縁は朝顔型に外反し、胴部のくびれが著しい。垂下する隆起線による区画は6区画、地文は櫛歯5本、幅1.6cmの綾杉文で加飾され、その中央を蛇行状の沈線文がたれ下がっている。型式は前記の土器と同様に加曽利E Ⅱ式に属するであろう。

ハ．Bトレンチ出土土器

Bトレンチ内では第16図のごとき土器が検出された。縄文を地文とし、この縄文を磨消して幅広の沈線文を垂下させて区画をつくった土器である。沈線の中帯は隆起文となってたれ下がっているが、焼成は黒褐色、器厚は厚く、雲母の混入がみられる。口縁の装飾はみられない。これもおそらく加曽利E Ⅱ式であろう。

ニ．Cトレンチと特殊石組内出土土器、

Cトレンチとその拡張部から発見された石組、および焼土付近から発見された土器については、焼土と石組の間に若干のレベルの差が認められるが、明確な層位を区分することが出来ないので、ここでは一括して記述することにした。大体次の4群に分けられる。

第1群土器

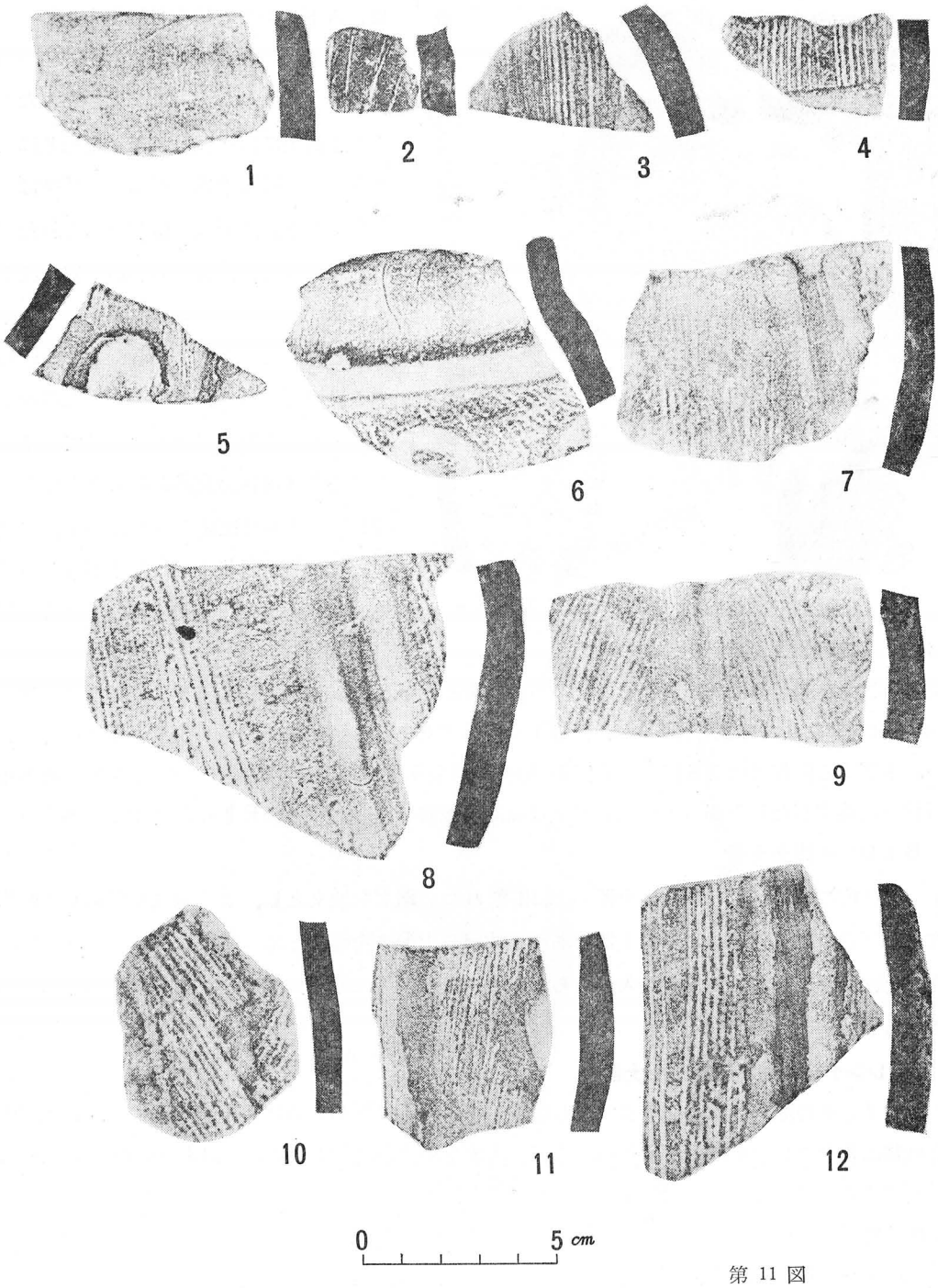
この群はまた三類に分類出来る。

第一類（第11図、第12図1～6、11、18、19）

敷石遺構内のものと同じく、肉彫的な渦巻文と条線文との組合わせからなり、地文の条線文は櫛状の施文具を用いたもので、器厚は1cm前後と比較的厚く、焼成はやや悪い。

第二類（第11図、第12図、第13図7～10、12、25、27、28、29、31、32）

地文を櫛歯状の施文具を用いて加飾する技法は第一類と変わらないが、胴部に中帯を垂下させ、さらに沈線の蛇行状文をほどこした類がこれである。第一類、第二類とも加曽利E Ⅱ式に入るものであろう。



第 11 図

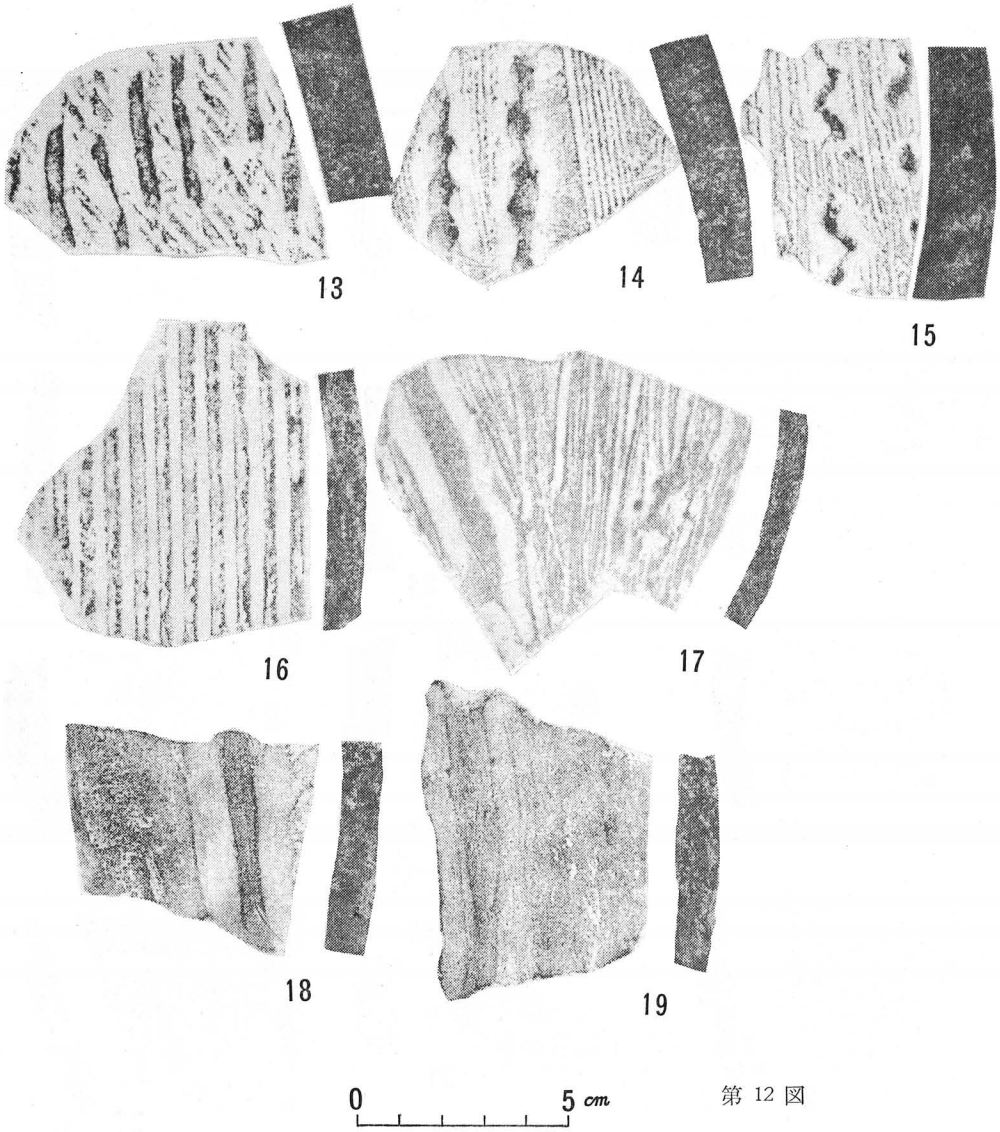
第三類（第13図23、26、30）

条線文と沈線文の組合わせから成っている。また縄文と沈線文の場合もある。

第２群土器

第一類（第12図13～15、第17図12）

櫛目の施文具による条線文、または半截竹管による沈線文の上に粘土の紐によって文様をあしらった土器である。器厚は２㎝近くあって非常に厚手である。また夾雑物も多い。器形は甕形で、口縁と胴部



第 12 図

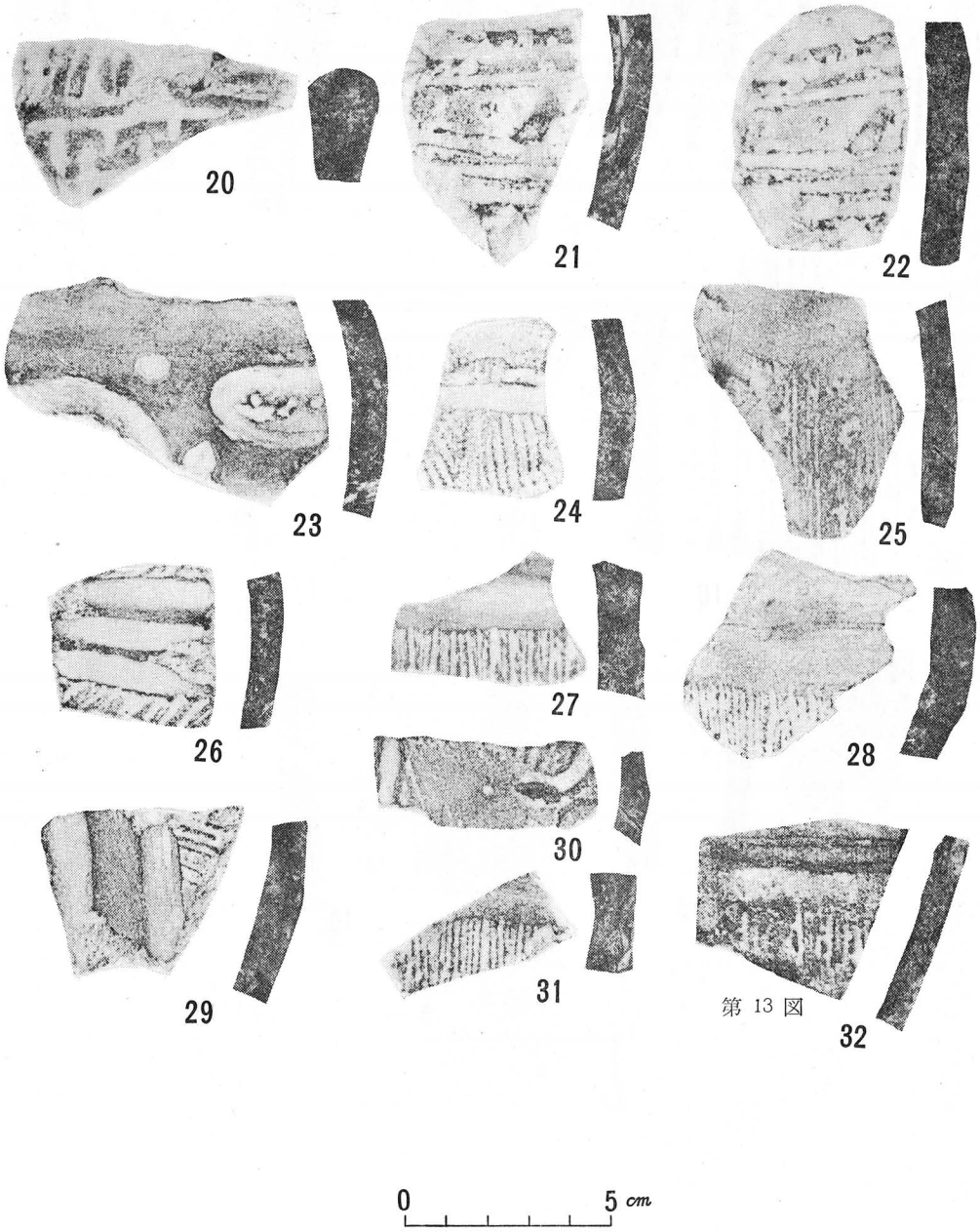
の接合点にしばしばX字状の把手がつくが、本遺跡でもAトレンチ、Cトレンチよりこの類の把手の一部が発見されている。加曽利E Ⅰ式に属するものであろう。

第二類（第12図16）

半截竹管による縦位の沈線文が幅広に整然と施されている。これは技法的には勝坂式からこの様式がみられるという。器厚は1㎝内外と厚く、焼成は堅緻である。

第3群土器

第一類（第13図20、第17図13）

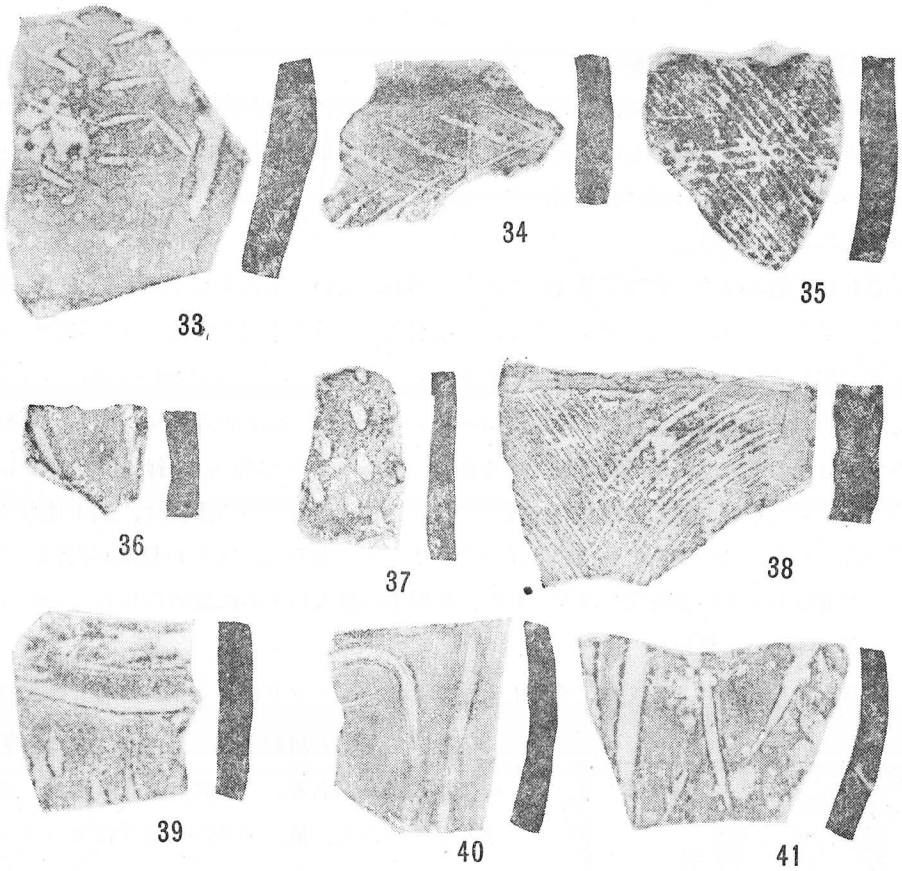


第 13 図

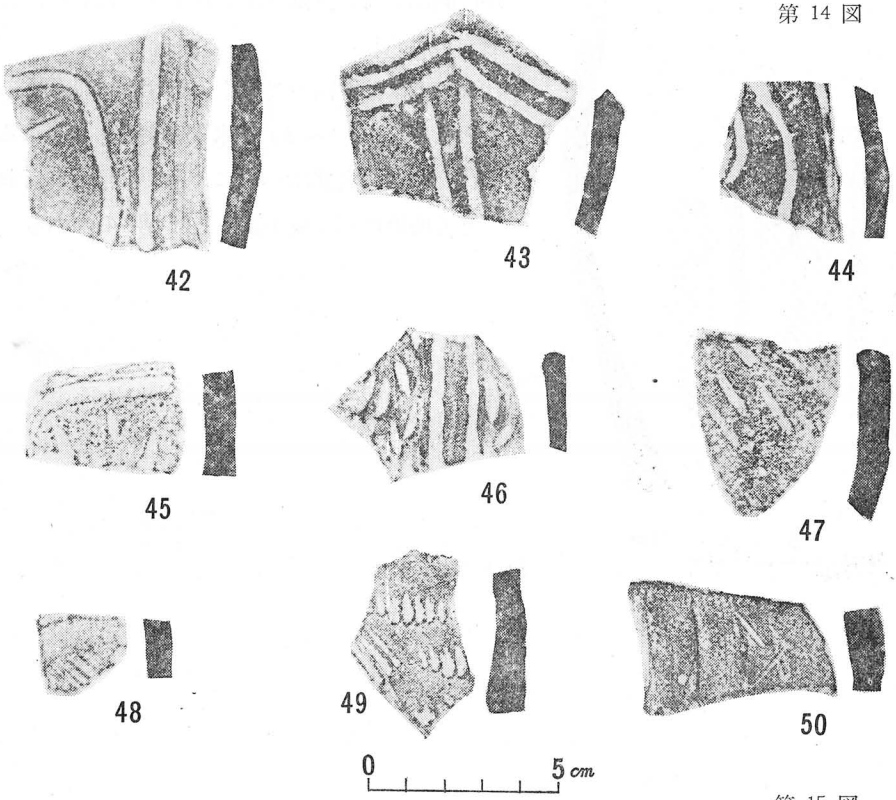
口縁装飾を有し、浮き彫りの入組文に粘土紐をはりつけた土器で、焼成は赤褐色を呈している。勝坂式に属するであろう。

第4群土器（第14図、第15図）

この一群はヘラ状施文具、もしくは半截竹管による細形の沈線文を施した土器で、その一つとしては平行線文、平行斜線文、曲線文などを多用し、あるいは組合わせたもので、なかには条痕文もあり、綾杉文を組合わせたものもある。また不規則な直線、波状の曲線を描いたものもある。こうしたヘラ状施文具による沈線文の土器は加曽利EⅡ式から生まれてきているのではないかと思われる。



第 14 図



第 15 図

ホ．601地点出土土器にみられる特色

本遺跡の土器には、技法的に勝坂式、加曽利E式、堀之内式がみられ、また各トレンチの出土土器についても、型式的にこれら以外のものは発見されていないので以上の記述によって、その特色はつかめると思うが、一応その特色を口縁部と底部の面からみてみよう。

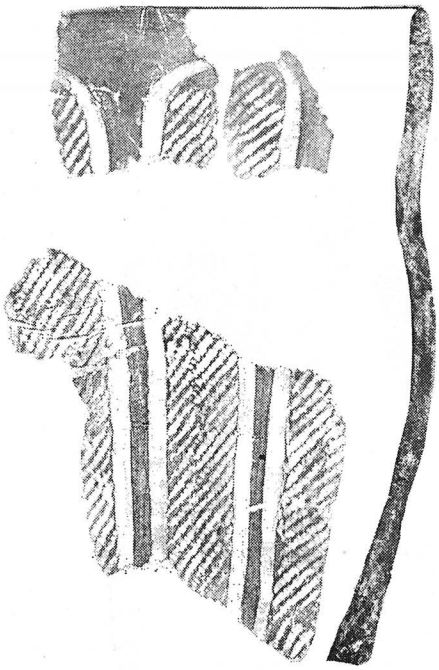
（1） 口縁部にみられる特色

今回発見された土器には大形甕の形態はほとんど認められない。深鉢もしくは浅鉢が圧倒的であった。口縁装飾はほとんど彎曲しない平縁が多く、口縁付近に無文帯を持つたもの（第19図34～41）口唇の下に深い沈線を配して器面を装飾しているものも多い。（18図14～21、23、第19図24～33）

口縁部がいちぢるしく内彎する器形は第17図 3～7のごとく、一条の凸帯をめぐらした土器で、地文の縄文をヘラで磨消しており、焼成は堅緻であるが、一様にススケて黒い。口縁の彎曲が乏しく、平縁のものも多く、しかも平行もしくは波状の沈線が一律にほどこされている土器は、関東地方で加曽利EⅢ式に比定されており、この遺跡の一つのタイプを示すものであろう。また口唇部が内側にひねり返しとなって、その部分から荒い条痕文をほどこした、勝坂系の器もわずかに認められる。（第18図22）

（2） 底辺部にみられる特色

本遺跡には無文土器片が数多くあり、そうした土器片にはヘナタリによる条痕が著しいものがある。

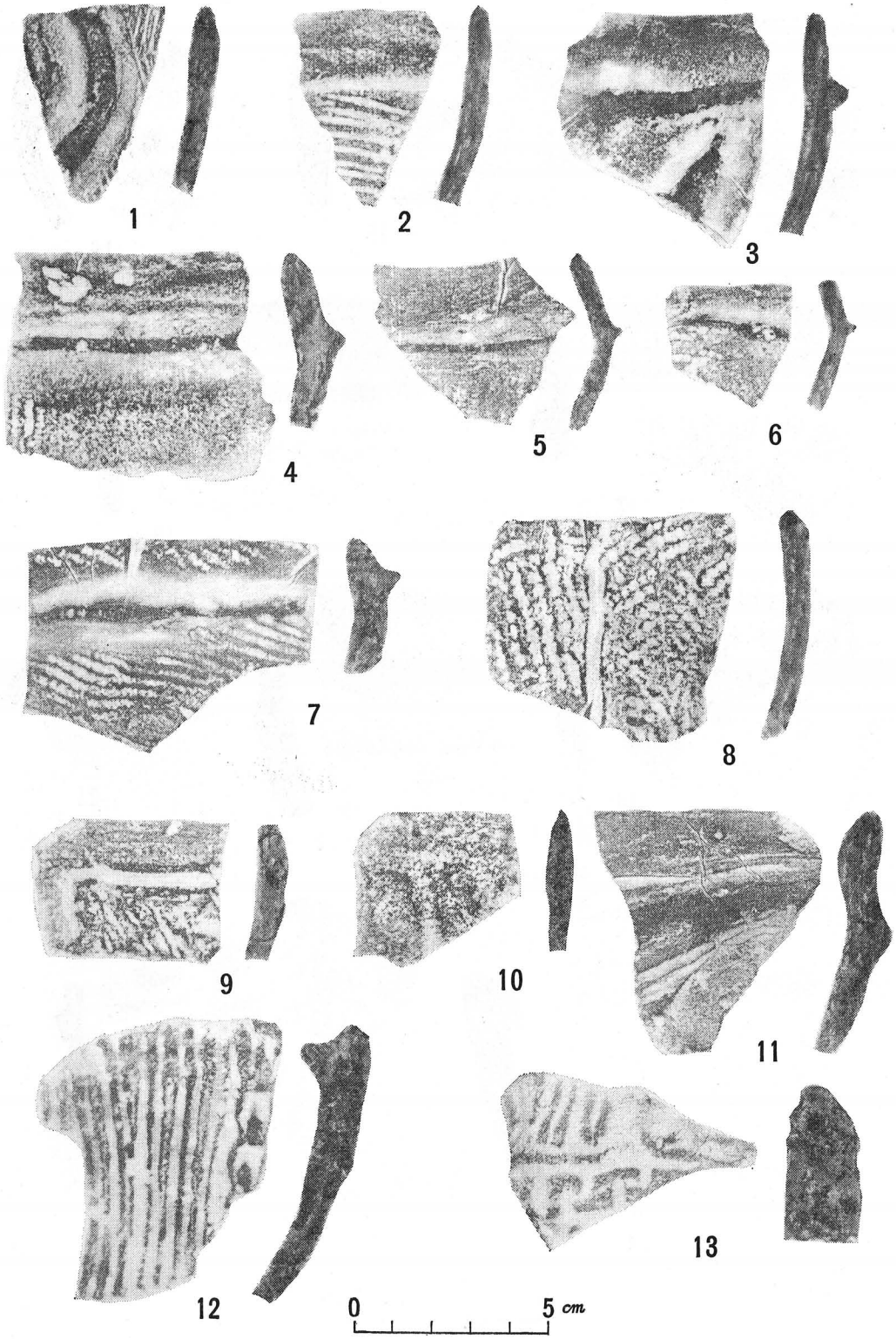


0　5　10cm

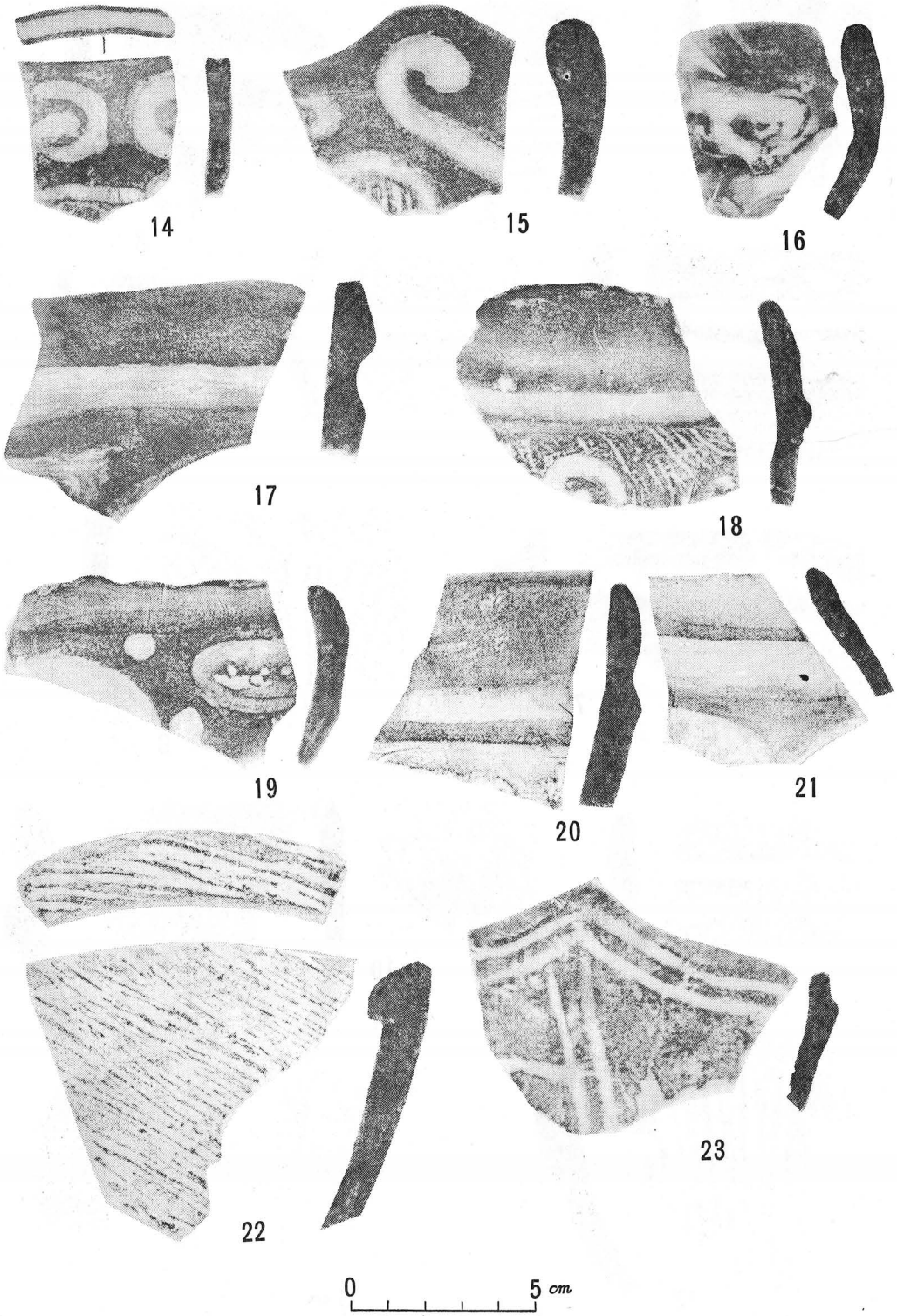
第 16 図

いわゆる無文の粗製土器で、やや完全に形態のわかるのに第20図 9がある。これによって判るが、底部の外反するものはなく、底辺に向かってすぼまっている器形がほとんどである。底部に近い器面は一様に無文で、わずかに胴部装飾の懸垂文がたれ下がったもの、あるいは条痕文がみられる。

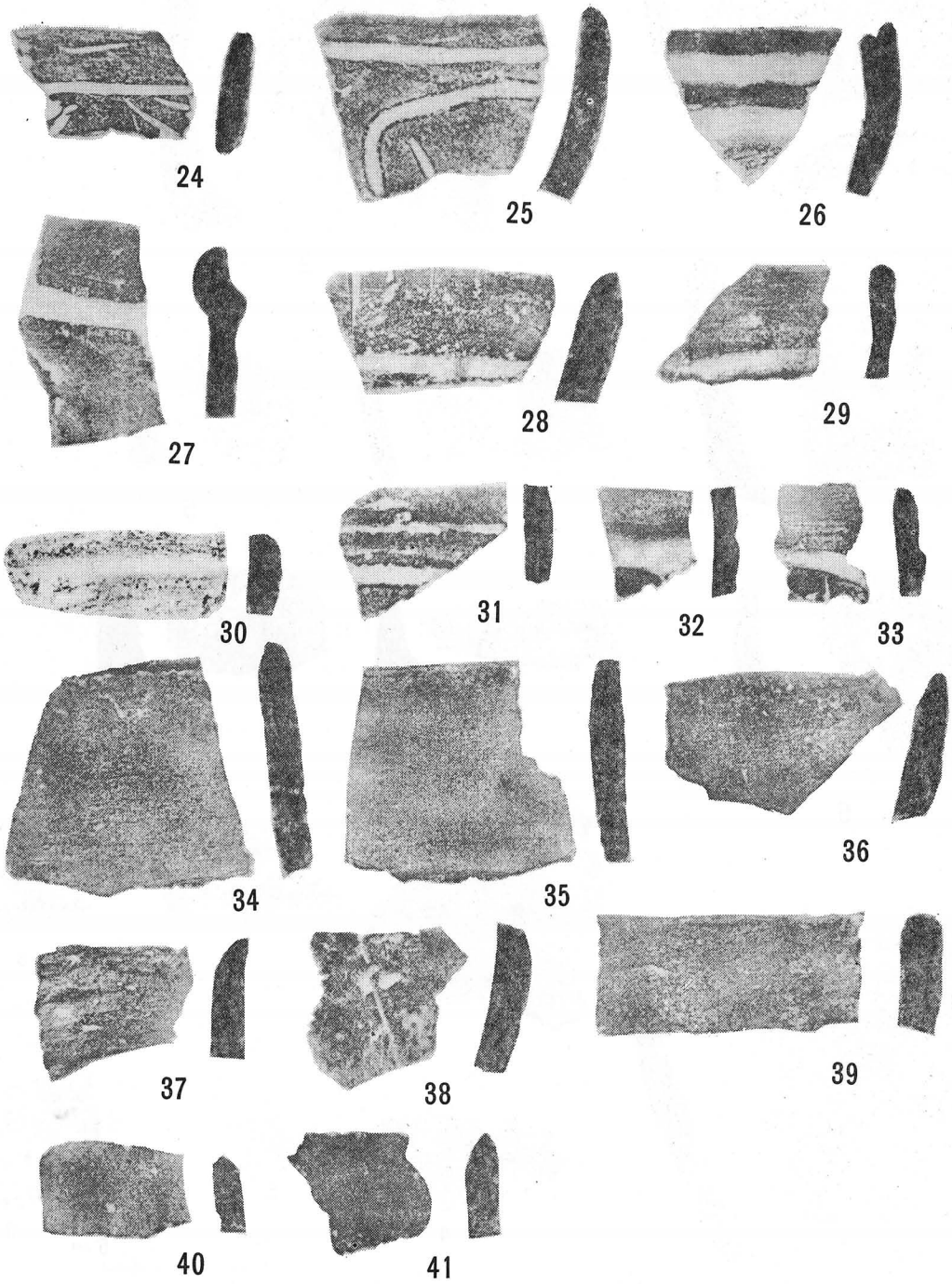
底部には第21図のごとく、わずかに網代文の圧痕が認められるもの（1～3）と木葉痕文のものがある（5、6）。網代文のある底部はヘラによって整形されており、4のごとく明瞭にヘラ痕が認められるものもある。



第 17 図

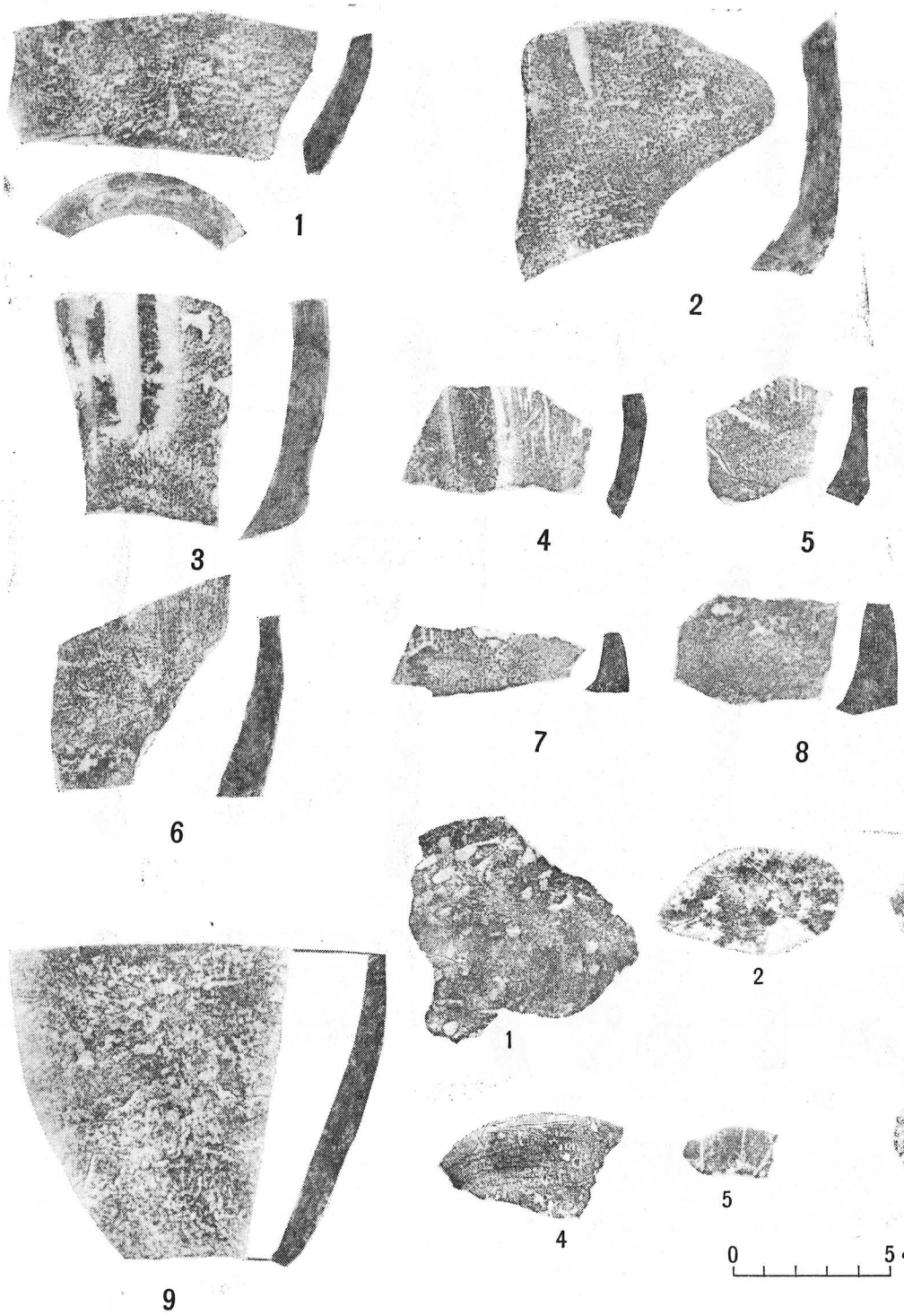


第 18 図

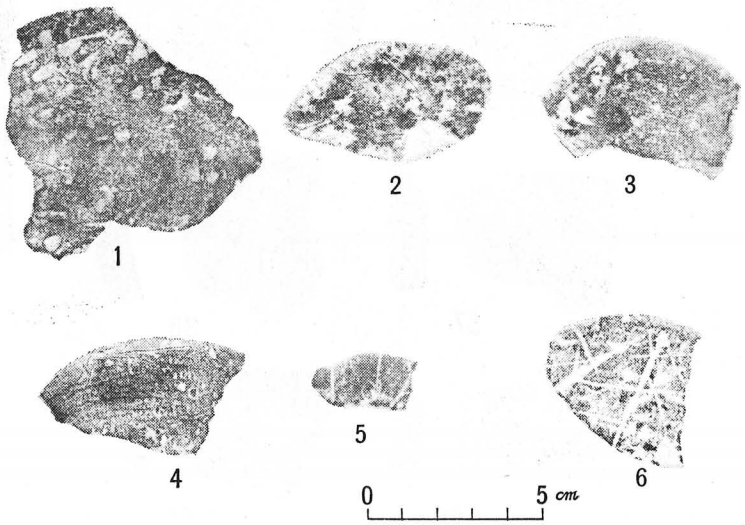


第 19 図

0 5 cm



第 20 図



第 21 図

B、691地点出土土器

本地区では前述のようにわずかに焼土の一部を発見したのみで、住居址らしきものの発見もなかったが、グリッド内から出土した土器は601地点のものと近似している。 土器は次の6群に分けられる。

第1群土器（第22図1～10）

この群は601地点のAトレンチ焼土付近発見のものと近似している。 地文には櫛状施文具をつかった。条線文で、この条線文には縦位のものと横位のもの、さらに綾杉文とがある。この条線文の間を隆起線文で区画し、さらにそのなかに沈線文による蛇行状文をほどこしている。

第2群土器（第27図）

地文に縦位の浅い条線文をほどこしてさらに粘土紐をもって、口縁から胴部にかけて加飾しているが、焼成はやや悪く粗製土器である。

第3群土器

この群は二つに分けることが出来る。

第一類（第23図11～18）

地文に縄文をほどこし、その上にヘラ状施文具が半截竹管によって、細形の沈線文を加飾した土器である。焼成は赤褐色で堅緻であり、磨消縄文が多い。

第二類（第23図19～24）

地文に条線文をほどこし、その上に細形の沈線文を加飾している。焼成は褐色もしくは黒褐色で、やや粗製土器である。

第4群土器

第一類（第24図1～10）

口縁がほとんど彎曲しない平縁で、横走する沈線文か曲線文が配してある土器である。4のごとく極細の深い沈線による曲線文の小形鉢の破片と思われるものがある。

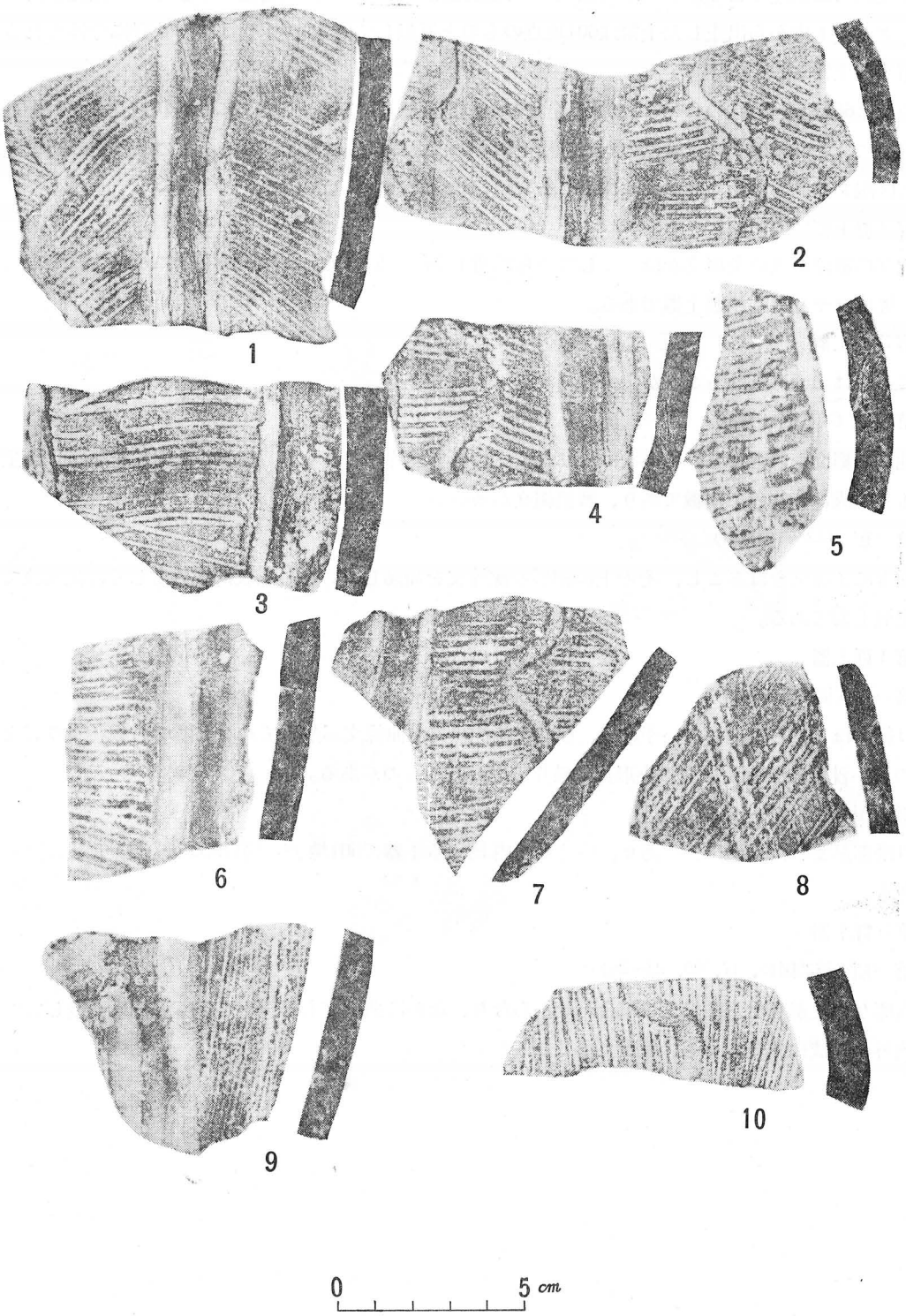
第二類（第24図11～14）

口縁部がまったく無文であり、いくらか内彎する土器で601地点（第19図34～41）に近似するものである。

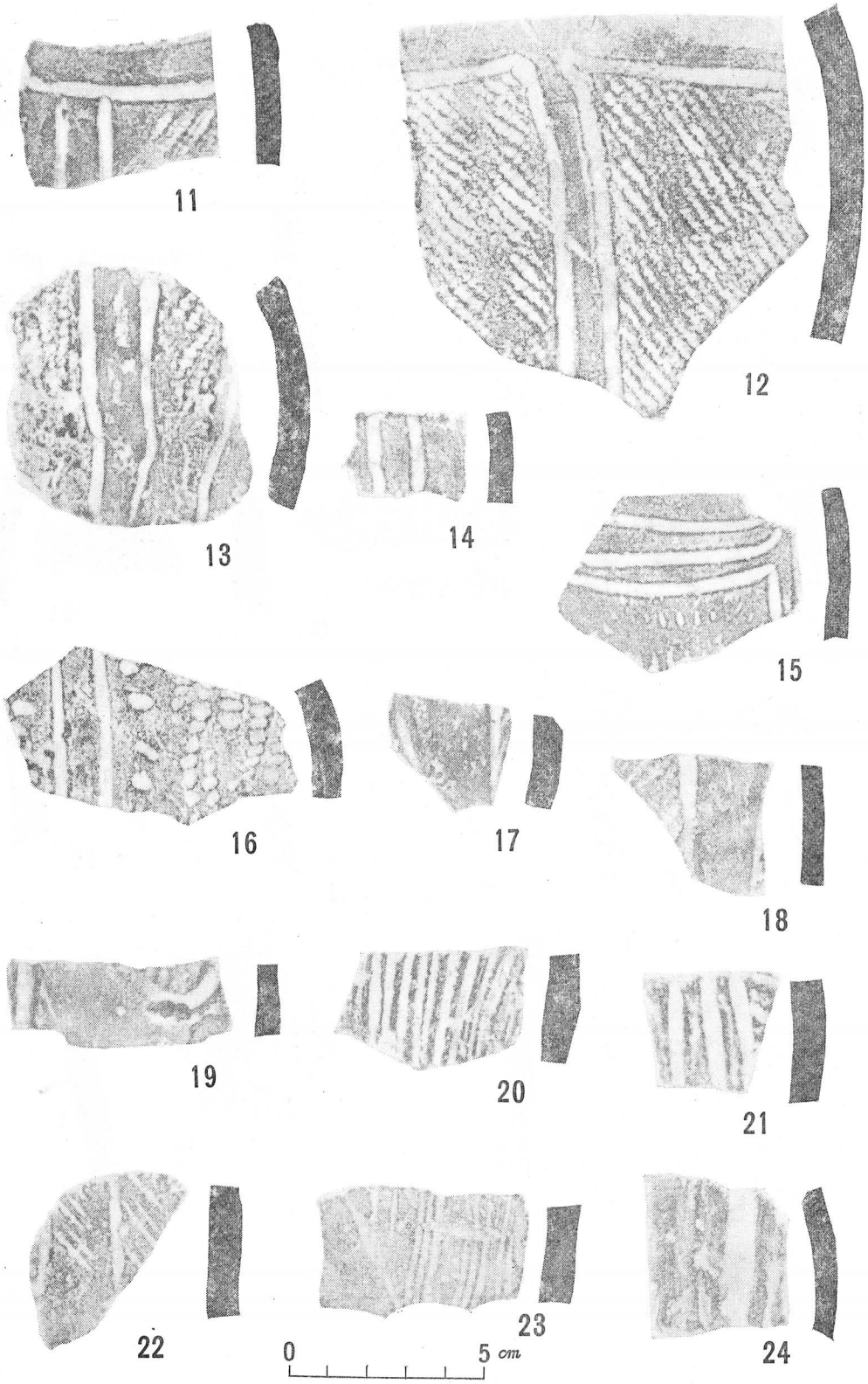
第5群土器

第一類（第25図15、17、20、23～26）

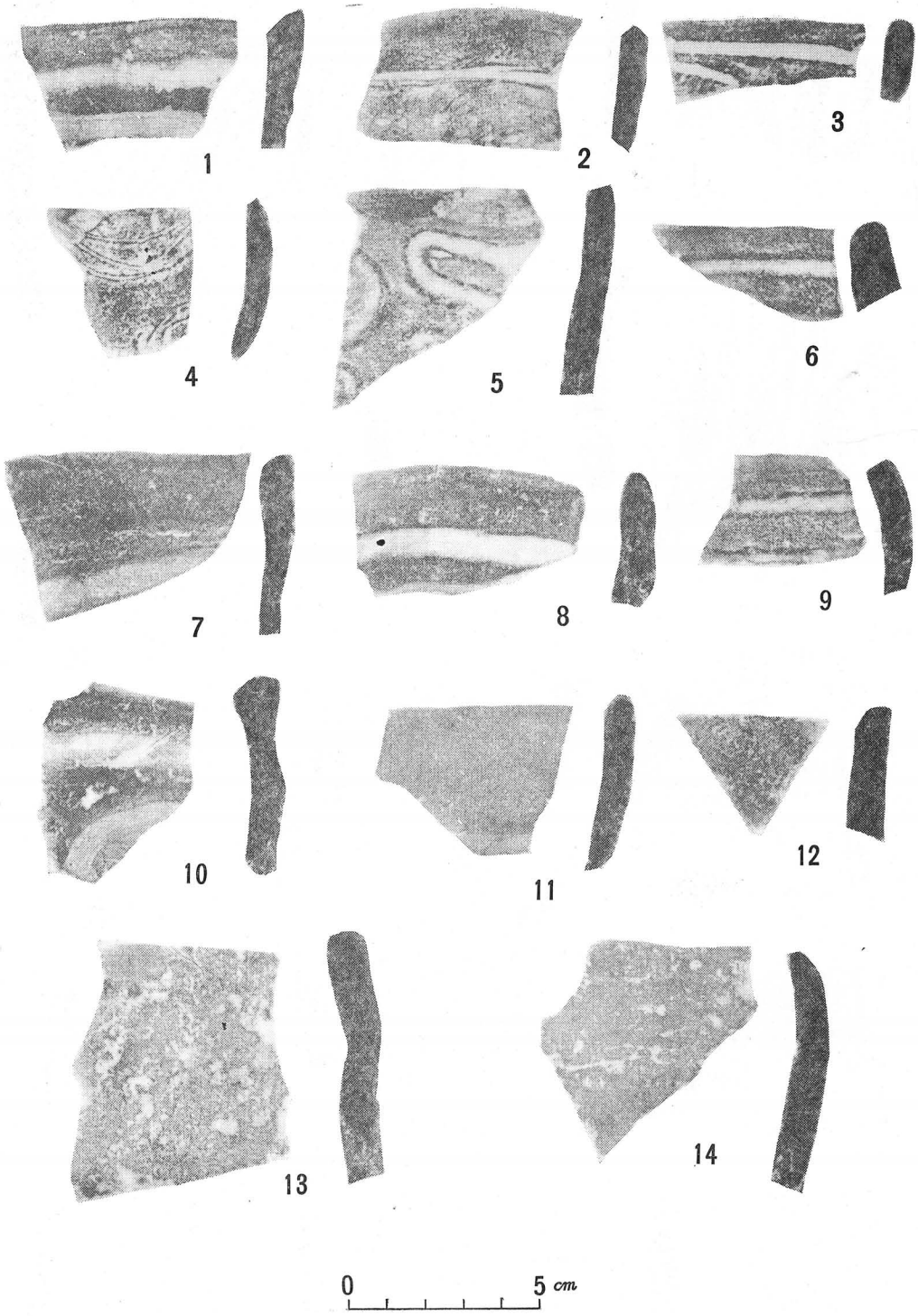
肉彫り的な渦巻文と条線文の組合わせからなり、なかに曲線文も入っている。器厚は概して厚く1㎝内外、焼成は褐色を呈し、堅緻である。



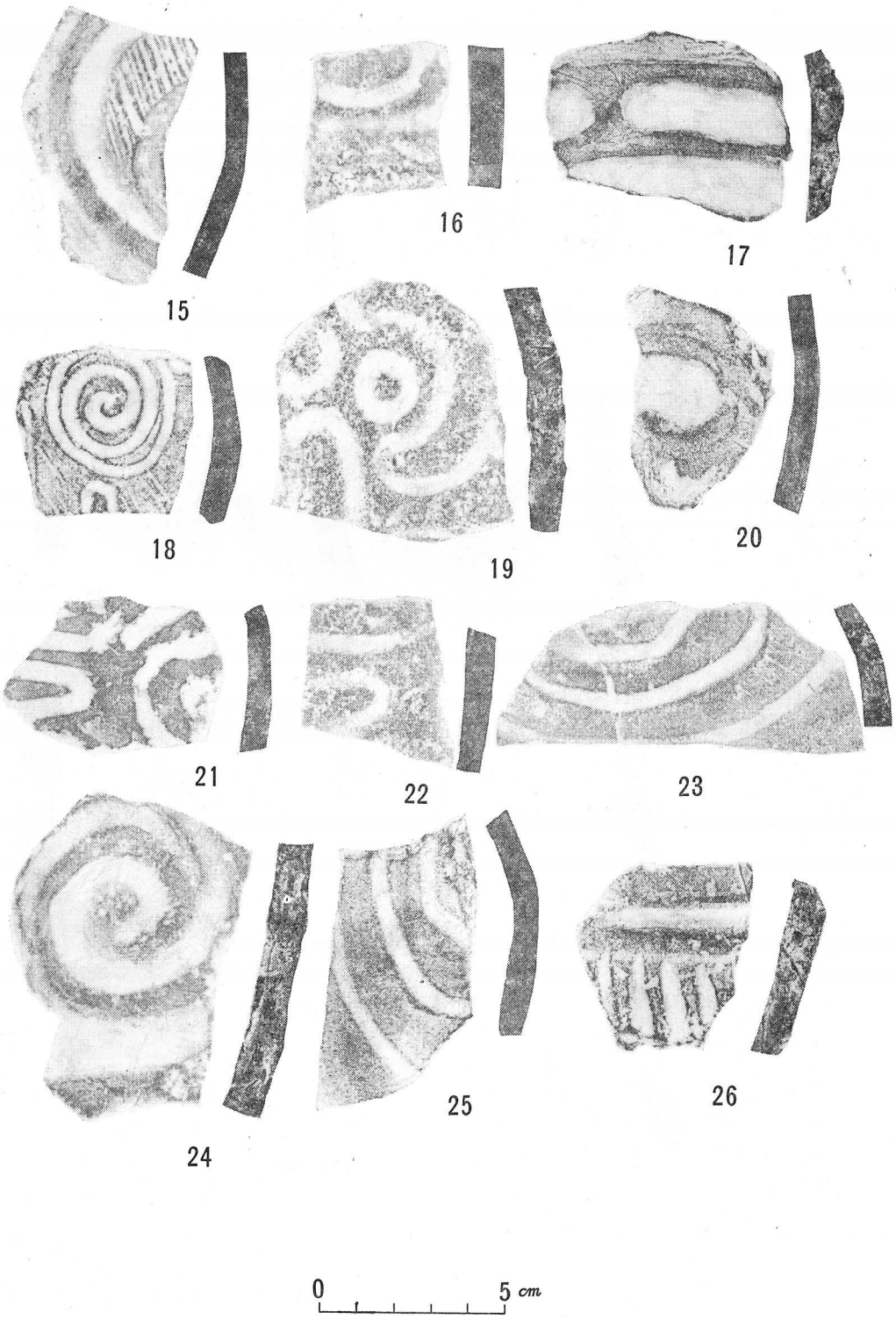
第 22 図



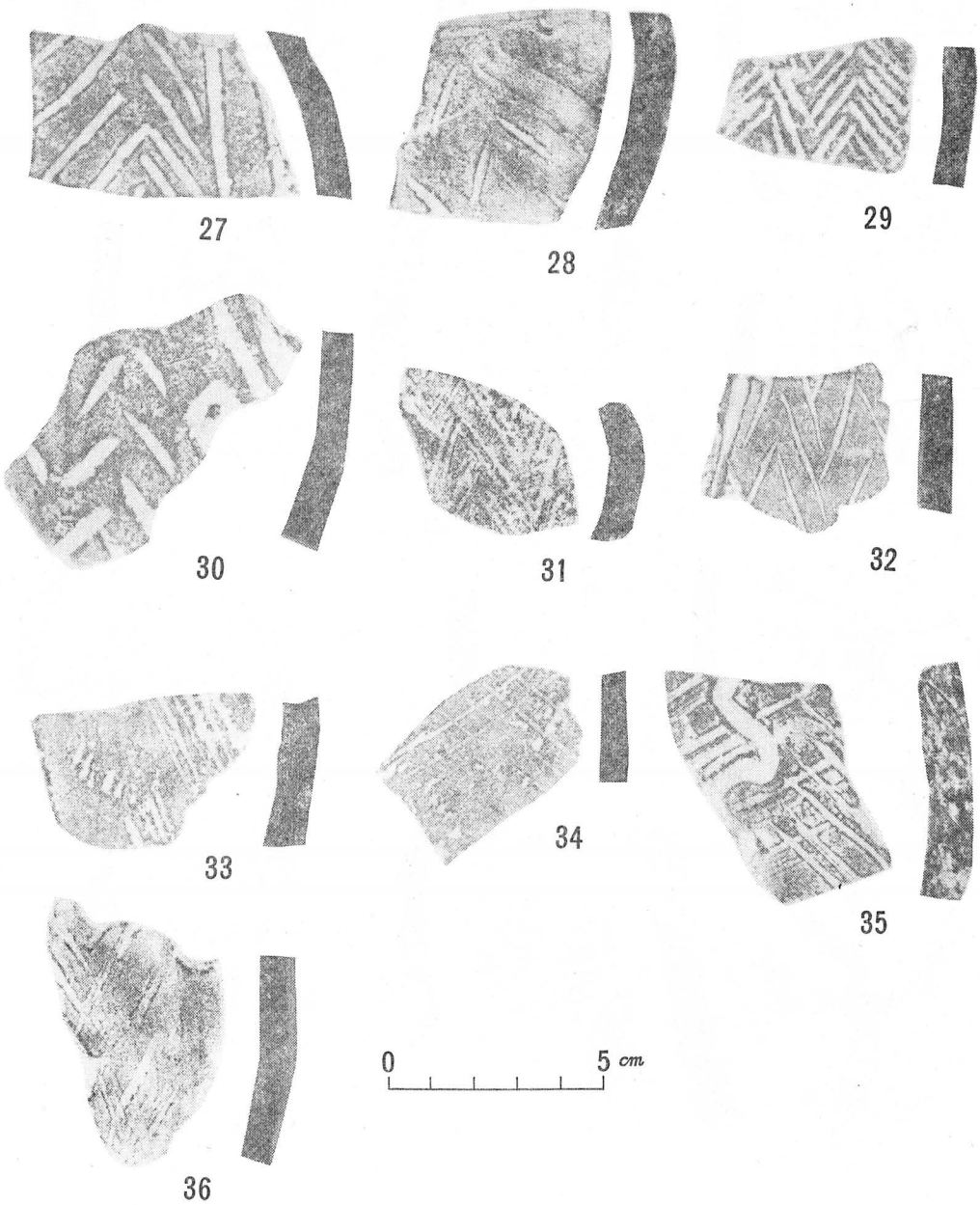
第 23 図



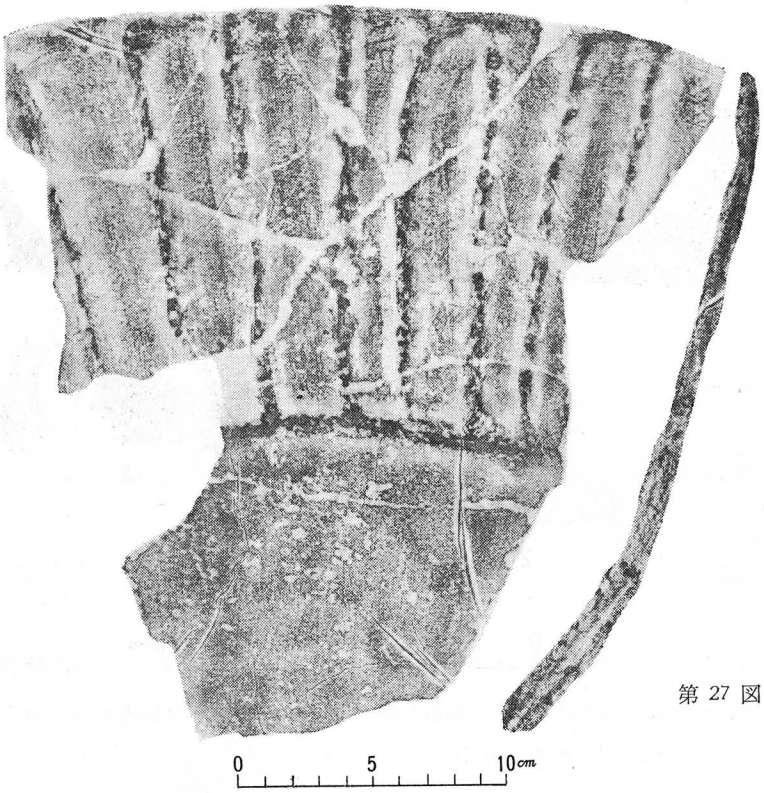
第 24 図



第 25 図



第 26 図



第 27 図

第二類（第25図18、19、21～22）

半截竹管かヘラ状の施文具で渦巻文、曲線文を入り組ませた土器で、地文が無文のものと条線文がほどこされたものとがある。

第6群土器（第26図）

ヘラ状施文具による「ハの字」型連続文、綾杉文、刺突文等のほどこされた土器で、601地点にも同様の型式のものが多い。焼成はやや良好で、赤褐色を呈しており、雲母の混入が多い。

691地点出土土器にみられる特色

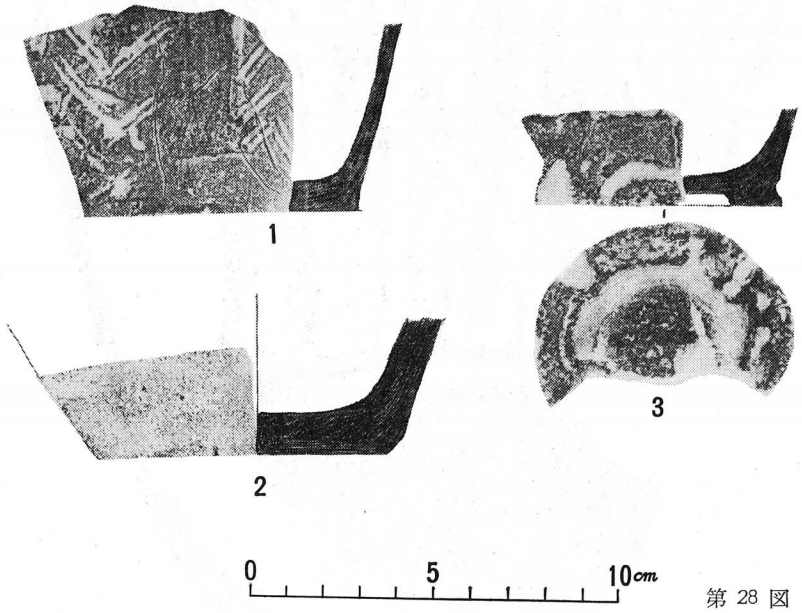
以上のように691地点の土器は601地点に近似し、型式としては、主体は加曽利E式の後半期のものであるといえよう。

目立つ技法としては、深鉢型、あるいは甕型土器の場合、隆線文を用いた渦巻文と胴部に櫛状施文具を使った条線文が目立つこと、またさかんに綾杉文や「ハの字」状のヘラ書文をほどこしていることで、これは加曽利EⅡ式あたりに盛行するもので、本遺跡の位置を表わすものであろう。

また本地点出土の口縁はほとんど彎曲していない平縁の土器が多い。また文様も隆起線が沈線化してひくくなっていること、さらに半截竹管による平行線文、曲線文、弧線文の連続したような体部への装飾が目立ち、縄文は単節の斜行縄文で、磨消縄文がややあらわれてきている点は注目される。ただし磨製の精製土器はあまり目立たなかった。

ヘラ状施文具による「ハの字」状の連続文、刺突文は中期後半から後期前半にかけて濃くみられるのであるが、601地点、691地点ともにかなり多く出土している。

底部は三個発見されている（第28図1～3）。1、2は網代の圧痕等はなく、ヘラ調整のあともみられない。1は綾杉文、2は無文で底部は外反せず、立上りはそのまま上につづいている。3は一個だけの



第 28 図

異形土器で、切り高台になった上げ底で、沈線による曲線と切りこみの加飾がみられる。焼成は悪く、暗褐色を呈しており、雲母の混入がみられる。

C、石　　器

石器の出土は601地点のみで、691地点では黒耀石の破片が若干出土したが、いずれも剥片であった。601地点からもその数は少ない。打製石斧２、凹石３、磨り石１、石錐１、石刃１という内容である。

打 製 石 斧（第29図１、２）

特殊石組の焼土近くのピットの中から発見されたもの(1)、Ａトレンチの敷石住居址近くの表層で発見されたもの(2)の二つである。短冊形、安山岩質である。

凹　　石（第29図４、５、６）

石組の最下層より、４、５が近接して発見され、６は石組のなかにあった。安山岩質で楕円形のやや扁平な石で４は表面と側面に、５には表面のやや片側に凹みがある。そして磨り石のごとく角が稜線をなしている。６は自然石を打ち欠き、一方の表面に二ヵ所、片側に一ヵ所の凹みがある。この石器はこすった様子はみられない。

磨　り　石（第29図３）

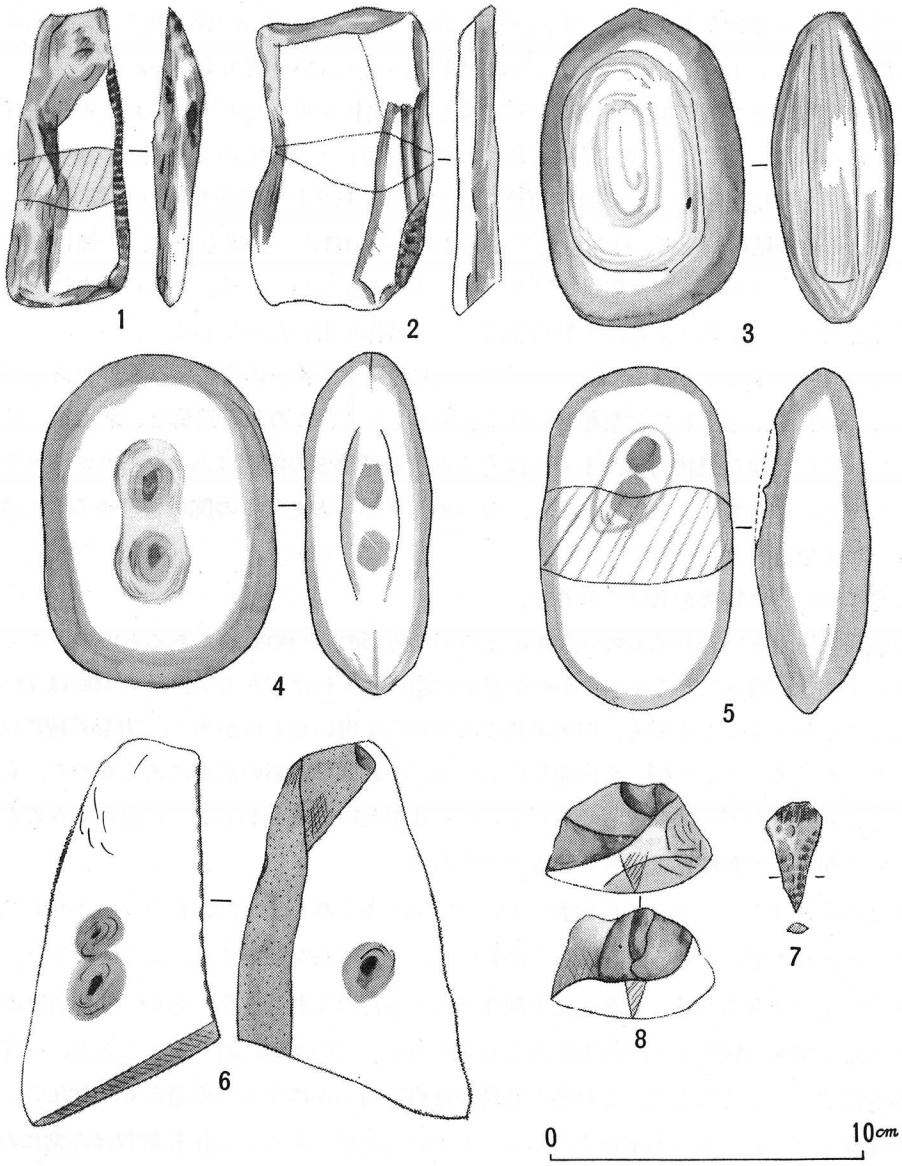
石組と同じレベルから発見された。敲き石、あるいは凹み石に似ているが、周囲に物をすった痕が稜となって残っている。

石　　錐（第29図７）

敷石遺構の炉の近くの床面で発見された。基部につまみを持ち、形はよく、材質は黒耀石で精巧に出来上がっている。

石　　刃（第29図８）

Ａトレンチ内の中間層から発見された。石刃といえるかどうかはいささか疑問であるが一応ここにあげておく。



第 29 図

6. 考察……敷石遺構について

いわゆる敷石住居址については、縄文文化時代の特殊な遺構として、古くから注目され、それについて種々の報告、見解が発表されているが、遺跡の数は必ずしも多くはない。特殊な遺構ということは、この様に数が少ないこともその要素の一になっているだろうが、その分布の範囲が限定されているらしいことも考え合わせられているであろう。

従来の研究で敷石住居址について、発掘報告などで、それぞれの見解が出されているが、総合的に見解を述べたものは少ない。たとえば後藤守一「上古時代の住居」（人類学先史学講座、昭和15年）、寺田兼方「敷石住居址の研究」（若木考古44、45、46、49、50、51、55）などはその例であろう。

この様な総合的、個別的見解を通して問題となっている点は大きく分けると二つになると思う。その一はいわゆる敷石住居址とよばれるものは、果たして住居址かどうかという、いわば根本的な問題で、

その二は形、構造、出土遺物などを考え、年代決定、分布などについての問題である。もちろん第二の問題は第一の問題を考える上には切りはなすことは出来ないことはいうまでもない。

第一の点に関連することであるが、標題に敷石遺構という名称を用いたのは、いわゆる敷石住居址とよばれるもののなかには、必ずしも住居址的ではない要素を持っているものもあるということからである。たとえば群馬県小室遺跡[註2]、あるいは桐原健「縄文中期にみられる室内祭祀の一姿相」（古代文化21—3.4）にみられる長野県の例など、住居址的ではあるが、そのほかの要素も多く、一概に住居址といいきれないものもある。今回の例には住居址以外の要素はみられなかったが、以上の様なことも考えにいれて、敷石住居址ということばを避けて敷石遺構という名称を用いたのである。

ここで住居址以外の要素というなかには、いわゆる祭祀的要素が第一に考えられるのであるが、その点については後にふれることにして、祭祀ということから考えて、この敷石遺構と、北海道、東北地方などに盛行しているいわゆる環状列石、あるいはその系統の遺跡との関連はあるだろうかどうかという問題がある。この点については、年代的な差と、分布圏などから考えてその関係を求めることはむずかしいのではないかと思われる。

構造、形態等についての特徴をあげてみると、

1、いわゆる敷石住居址といわれるもののなかには円形と方形の二つの系統があるという。この点については、敷石が完全に残っているかどうかの確認が問題になるわけであるが、その判断はむずかしい。一応二つの系統があるとすると、円形系統には河原石を用いたものが多く、方形系統には切石、板石を用いたものが多いという[註3]。今回発見のものは、いわば半円形の部類に入るもので、もしも全面にあったとすれば、円形系統に入るであろう。敷石は平たい板石である。この点からみると、先の「敷石住居址の研究」の見解とは違っているわけである。

2、以上のことに関連するが、全面に石を敷いていない例が多くあり、また縁石のはっきりしていないものもある。それゆえ形をきめることはむずかしいが、一部に石を敷いてないことになると、住居として都合がよいものであろうか。たとえば土間などがあったのであろうか。あるいは住居内の神聖な場所とそうでない場所の区別をつけた表われであったのか。この全面に石を敷くことと、一部に敷くことの意味を追求していくことは、この種の遺構の性格を明らかにする一の道かも知れない。

3、この種の遺構が竪穴式であるか平地式であるかも重要な問題である。これも解釈は非常にむずかしい。古く発見されたもののなかには壁面についての観察が必ずしも十分でない点も見うけられる。完全に竪穴式のなかに入るものもみられることから考えても[註4]、平地式という考えは検討を要するであろう。今回調査のものは周囲の縁石が縦に用いられており、明らかに区域を画しているわけで、その石の高さが底面より15cmも高いということは、このあたりに土の壁があったことも考えられないことではない。発掘中の観察では、壁の確認が出来なかったので、決め手はないが、竪穴式としても壁高がひくく、平地式に近いものではないだろうかというにとどめたい。

4、炉についてみると、方形、円形、多角形とあるが、方形プランの遺構には方形の炉があるというが[註5]、今回の例は円形の遺構に方形の炉があるということになる。

5、張り出し部についてみると、この種の遺構には張り出し部のあるものがみられる[註6]。今回のものについても北の方の石組を張り出し部と考えられないこともないが、一応別のものと考えている（7頁）

この張り出し部についての考え方は何か祭祀の場所ではないかという意見がある[註7]。そうすると今回のものもそのように考えて遺構に付属するものとしてもよいかも知れない。

以上のようにみてくると、構造などの点から考えて、今回の敷石遺構は細かい点において特別なものはあるが、一応通常のものと考えられ、いわゆる今までいわれている敷石住居址のなかに入るものであろう。ただしこの種の遺構が必ずしもすべて住居址であるというわけではないことはいうまでもない。

次に分布の問題について考えてみたい。いわゆる敷石住居址の特徴のもっとも著しいものは、この分布である。その分布は関東地方の西部山岳地帯を中心にひろがり、一部伊豆半島にのびているとはいえ、群馬、埼玉、東京、神奈川、静岡、山梨、長野の諸県に及んでおり、縄文文化遺跡の全国的分布からみれば、きわめて特殊な分布のしかたをしている。しかし今回の例はこの分布圏のなかに入っているので、その点からいえば特別なものとはいえないであろう。

山梨県におけるこの種遺跡については、「県立富士国立公園博物館研究報告第4号」の山本寿々雄「山梨県下の敷石遺構」としてあげられている。それによると、県内に8カ所があげられている。また山本寿々雄「山梨県の考古学」（吉川弘文館、昭和43年）にも石造遺構を含めて10ヶ所ばかりあげているので、大体この位が現在までに分かっているものであろう。このうち一ヶ所を除いて皆南都留郡と北都留郡にある点が注目される。この一ヶ所は西八代郡大塚村（現在三珠町大塚）の西村のものである。ここは今回発掘のものにかなり近く、その点ではこれらは都留郡のものとグループを異にするかも知れない。西村のそれについては、仁科義男「甲斐之考古」第三篇と宮崎糺「甲斐国西八代郡大塚村西村の敷石住居について」（史前学雑誌8－2）がある。曽根丘陵の西端に近く、笛吹川を見下す台地の縁辺にある。平板状の輝石安山岩を組合わせて敷きつめてある。大きさは長径4.3m、短径2.1m、炉が二カ所あったという。敷石面が傾斜していたこと、石棒が直立してあったことが特徴的である。出土土器は勝坂式、加曽利E式、堀之内式があるが、遺跡に伴うものは加曽利E式といわれる。

山梨県下のこの種遺構において、石棒を伴うものは、南都留郡谷村町法能のそれであり、敷石面が傾斜しているものは、大月市賑岡町駒橋大古屋敷にみられる。

また出土遺物についてみると、この種遺構からは大体加曽利E式、堀之内式の発見が多く、勝坂式、加曽利B式なども付近から出土している例がある。遺跡にはっきり伴うものは、どの遺跡においても明確にすることはできなかったが、大体において加曽利E式を中心とするものではないかと思われる。

今回の遺跡をこれらと比較してみると、石棒はなく、敷石面の傾斜もない、また出土遺物も特徴的なものはない。その点からいえば、一般的なものといえよう。しかし他のものとの年代的な前後関係を明らかにすることは難かしい。

次に年代の問題についてみてみよう。寺田兼方「敷石住居址の研究」によると、確実に床面から出土する土器をもとにして考えると、この種遺構の年代は加曽利EⅡ式、堀之内式、加曽利B式などであるという[註8]。そのうち加曽利E式と堀之内式に属するものの数が多い。しかし勝坂式土器を出すと思われるものもあるのではないかともいわれている。それは直接の出土ではないが、付近に勝坂式しか出土しないものがいくつかみられるからである。そして寺田氏は、遺構の形式から伊豆半島あたりに Urheimat があるとし、ここから山地へと伝播していったのではないかと考えている。しかし勝坂式土器を出すこの種の遺構は伊豆半島にはみられないのは、氏の考えとは相いれないところからあると思われる。

Urheimat に関すること、あるいは勝坂期までさかのぼるかどうかという問題は別にして、今回発見のものが、加曽利EⅡ式に属すると思われることは、この種遺構において一般的なものであるといえよう。

以上の様に今回の発掘によって得られた、この種の遺構については、今まで敷石住居址といわれていたもののなかに入れて考えてよいものであるが、最後にこの種の遺構の性格にふれてむすびとしたい。

前述の如く、敷石住居址といわれているものについては、地域的に、時期的に非常に限られたものを持っているので、そのあたりにその性格を考える手がかりがあるのではないかと思われる。すなわち縄文時代のある時期、ある地域における特殊遺構ということから考えて、ある特定の集団のなかから生まれたもの、そしてそれと運命を共にしたのではないかということも考えられないことではないだろう。その点、この遺構は海岸沿いの住民のなかから生まれたものとは、その分布の状態からしても考えられない。むしろ山の生活のなかから生まれたとした方がよいかも知れない。またごく狭い地域に、同じ時期の普通の竪穴住居址の存在を思わせる例（今回の発掘例などはその一例であろう）がかなりみられることは、特定の住民というのを普通の部族集団のようなものを考えるよりは、ある集団のなかの特別な人々に関係あるものではないかという考えも生まれてくる。ただこの点、従来の調査では十分追究されずにあったので、十分検討するデータがない。その点将来注意しなくてはならないであろう。

このように敷石遺構が特殊なものであると考えると、その特殊とは何かという問題が出てくる。これが祭祀関係のものではないかという点については前にふれたところであるが（16頁）、その点についてもう少し考えてみよう。

前に述べた張り出し部の存在、石棒のあること、あるいは敷石面が傾斜していること、さらには、敷石のある部分とない部分のあることもその要素になるかも知れない。

石棒を持つ遺跡は県内では前述の「法能」[註9]の例があるが、その他に神奈川県の秦野市寺山金目台[註10]、静岡県賀茂郡河津町見高[註11]、長野県上高井郡高山村坪井[註12]などの例がある。また張り出し部のあるもので祭祀関係のものであろうと積極的な意見を述べられているのは、群馬県の小室遺跡[註13]である。

この祭祀関係という点で前記桐原健「縄文中期にみられる室内祭祀の一姿相」は注目すべきものである。ここでは配石址（長野県埴科郡戸倉町福田、同郡坂城町込山C遺跡）と室内祭祀関係を考えているのである。この配石址というのは、立石があり、炉を設け、獣を焼いたと思われる痕跡があり、火熱をうけた骨片も発見されており、また甕のなかにも納められており、その上に立石があり、礫や石器も投入されているといい、ここで何かの儀礼が行なわれたのではないかと推測している。そして時期を中期後葉としている。

群馬県小室遺跡については、遺構に特殊構造の付属物があり、その先端に蜂の巣石を板石でかこってあるという。また遺構の周囲には土手がめぐらせてあり、それをこえるのに一段高い敷石が設けられ、ちょうど廊下の様に蜂の巣石のあるところまで付属施設がつづいているというのである。またこの報告では敷石遺構の全部が神秘的な祭祀を行なったところとはいえない。その一部に祭祀を行なう場所があり、この遺跡の付属施設などはその部分ではないかというのである。そしてのこの遺構は単に住居を目的としたものではなく、神事の場としての色が濃いといわれる。

以上のようなことを考え合わせて、いわゆる敷石住居址といわれるものは、特殊な遺跡であり、それは祭祀に関係のあるもの、あるいは祭祀に関係のある人の住居ではないか、そしてその祭祀は縄文時代のある時期のある地域に行なわれたものではなかったかと考えられてくる。これが一つの部族集団を、あるいはもっと大きな集団を考えるべきかは今のところなんともいえない。

7. む　す　び

以上で昭和43年度夏に行なわれた中道町の遺跡の発掘の報告を終わるが、小さいとはいえ、敷石遺構の一例を加えたことを喜び、炎天下発掘に汗を流していただいた学生諸君に感謝の意を重ねて表したい。次に参加者の名簿を記し、さらに報告の執筆分担を明らかにしておく。

発掘参加者

上智大学史学科卒業生

織本重道　佐藤克巳

南山大学人類学科学生

吉田妙子　榊原芳久

山梨大学教育学部卒業生

矢崎　勉　雨宮泰明　堀　君彦

山梨大学教育学部学生

浅川博子　乙黒恒子　田中正文　北原貞子
向山めり子　岩崎法子　小沢直恵　佐々木正子
田中秀子　広瀬　勝　跡部喜美　入倉正幸
河内明子　小林茂美

執筆分担

1、はじめに　吉田章一郎
2、遺跡の位置　〃
3、調査の経過　〃
4、遺跡の概要　〃
5、出土遺物　上野晴朗
6、考　察　吉田章一郎
7、む　す　び　吉田章一郎

なお遺物の整理については、山梨大学教育学部の上原稔・森雅昭両君の援助もうけた。

註

1、「曽根丘陵の自然」（山梨県地質図編纂委員会、昭和43年3月）
2、「小室遺跡」（群馬県勢多郡北橘村文化財調査報告、1968）
3、寺田兼方「敷石住居址の研究」
4、静岡県伊東市赤坂の例（伊東市史）
5、註3に同じ
6、神奈川県津久井郡相模町寸沢嵐の例
（古谷清、「寸沢嵐石器時代遺跡」史跡調査報告書第六輯）

東京都西多摩郡多西村草花字羽ケ田の例

（後藤守一「羽ケ田遺跡」東京府史蹟名勝天然記念物調査報告　第14冊、昭和13年）などがある。

7、註２の報告などはその例である。

8、神奈川県下の例としては、江坂輝弥「平塚市上吉沢敷石遺跡調査」（平塚市文化財調査報告、第五集）に、上吉沢は加曽利Ｂ１、秦野市金目台も加曽利Ｂ式、伊勢原町八幡台は堀之内Ⅱ式、寸沢嵐は堀之内Ⅰ式、愛川町半原の原臼は加曽利Ｅ式といっている。

また山梨県においては、西八代郡の西村のものは加曽利Ｅ、大月市賑岡町の大古屋敷からは加曽利Ｅ式の古いもの、及びⅡ式、堀之内Ⅰ、Ⅱ式、加曽利Ｂ式が出土したといわれ、法能からは堀之内Ⅱ式、加曽利Ｂ式が発見され、付近から勝坂式も出土している。

9、日本考古学年報５、昭和27年度

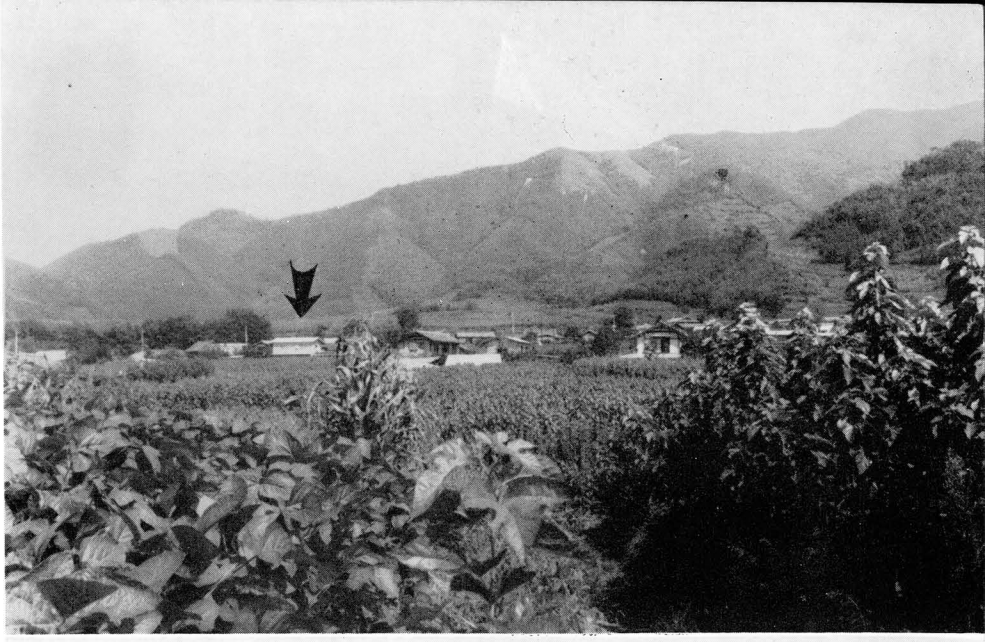
10、八幡一郎、矢島栄一「相模国中郡寺山の敷石遺跡」（人類学雑誌50―12、昭和10年）

11、大場磐雄「南豆見高石器時代住居址の研究」（考古学研究録第一輯、昭和２年）

12、信濃考古綜覧

13、註２に同じ

図版 I



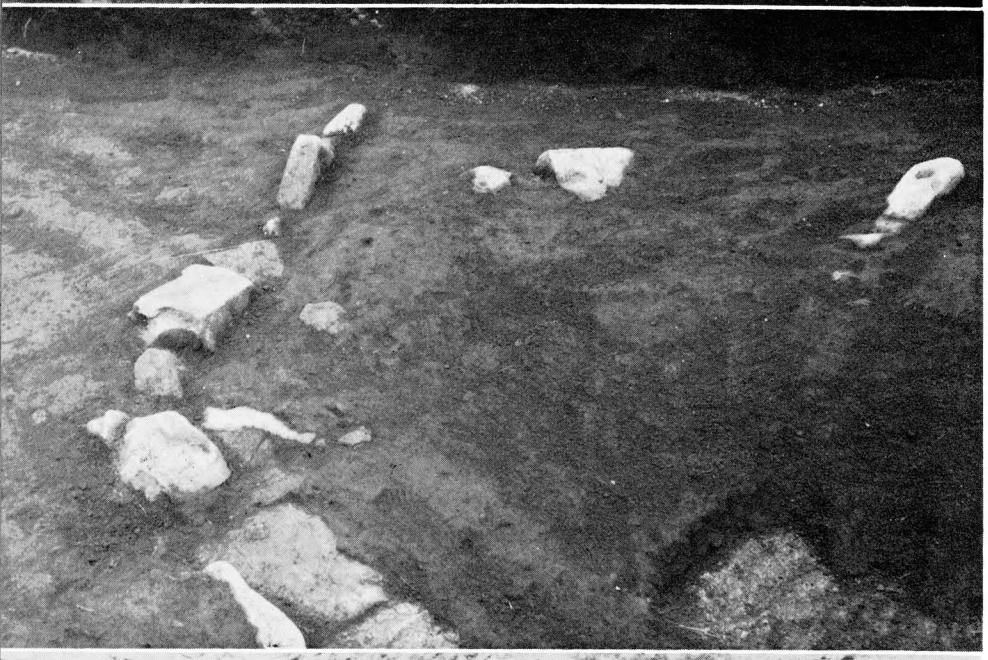
御坂山脈と遺跡遠望

宿の部落より遺跡遠望

601 遺跡

図版II

Aトレンチ壁石の出現

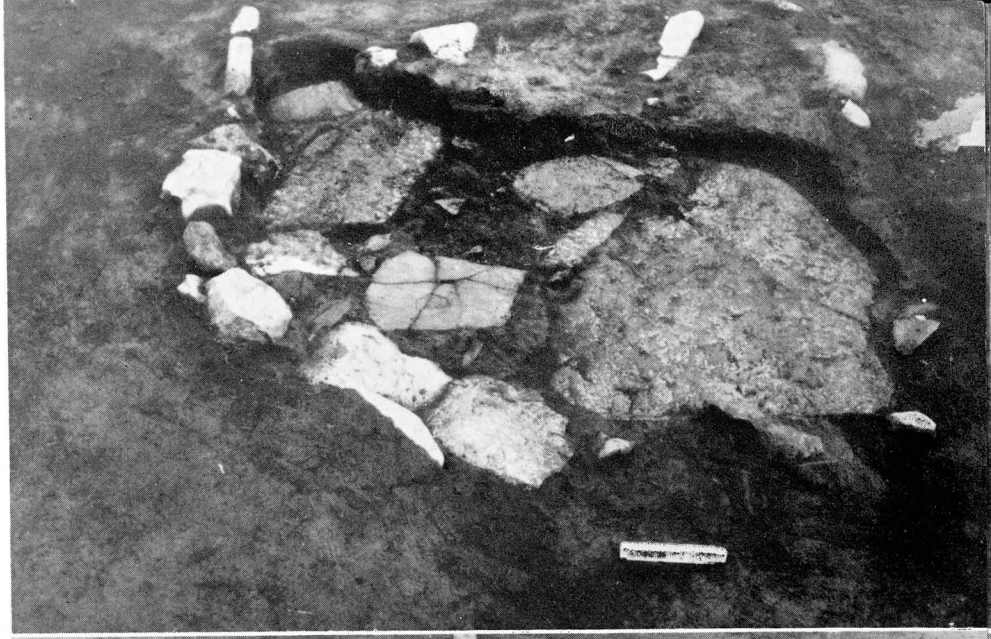


敷石遺構壁石

炉　址

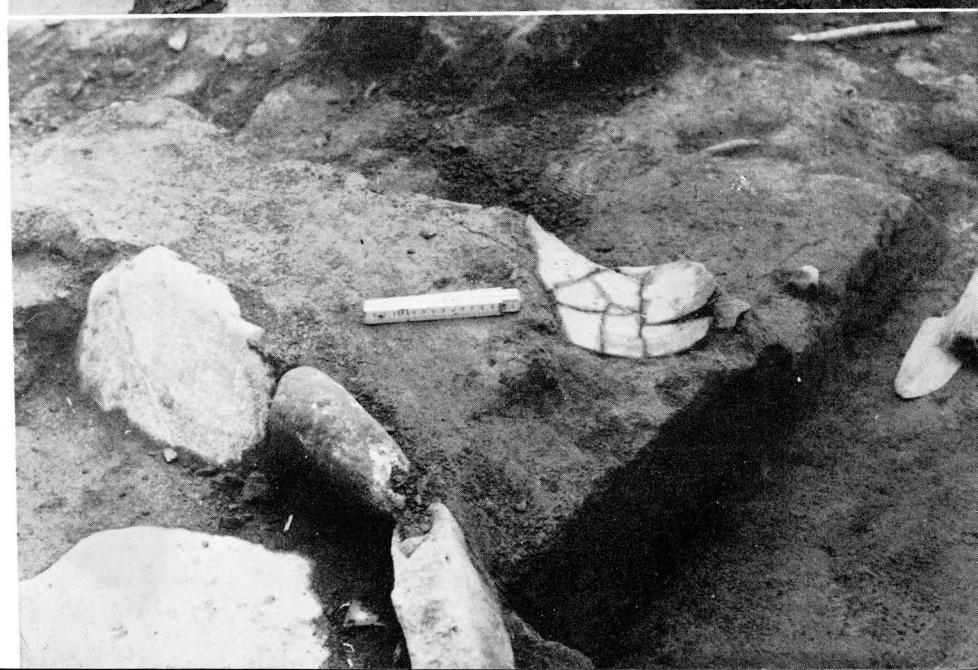
図版III

敷石遺構敷石



敷石遺構炉址

敷石遺構外土器出土



図版Ⅳ

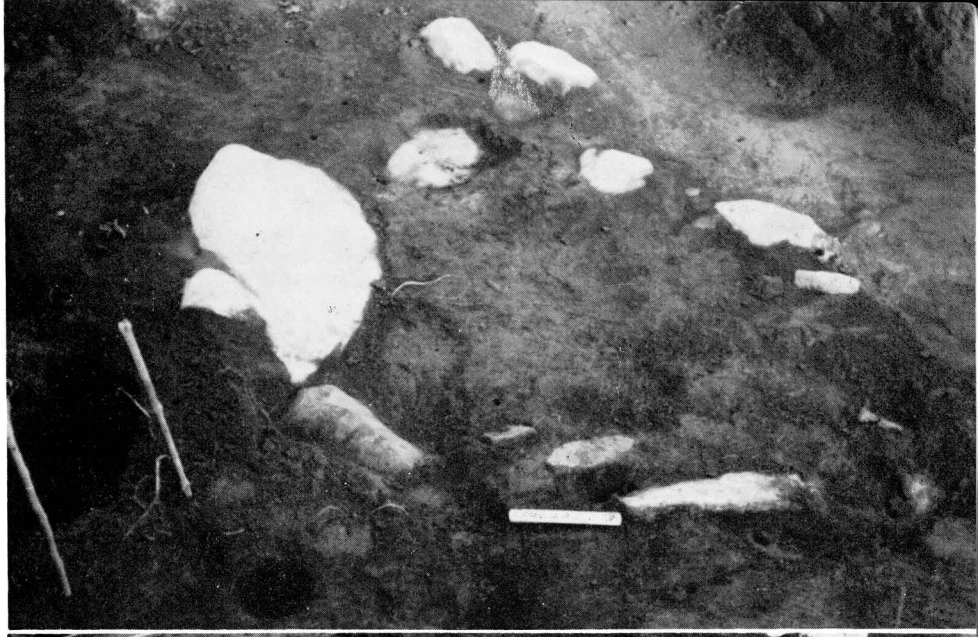
敷石遺構全景

同上

同上

図版V

敷石遺構北東部の石組



敷石遺構と石組

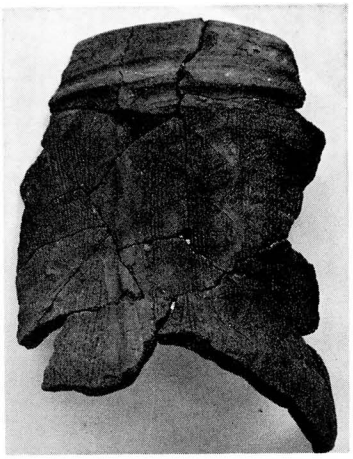
敷石遺構の北東部の塊石

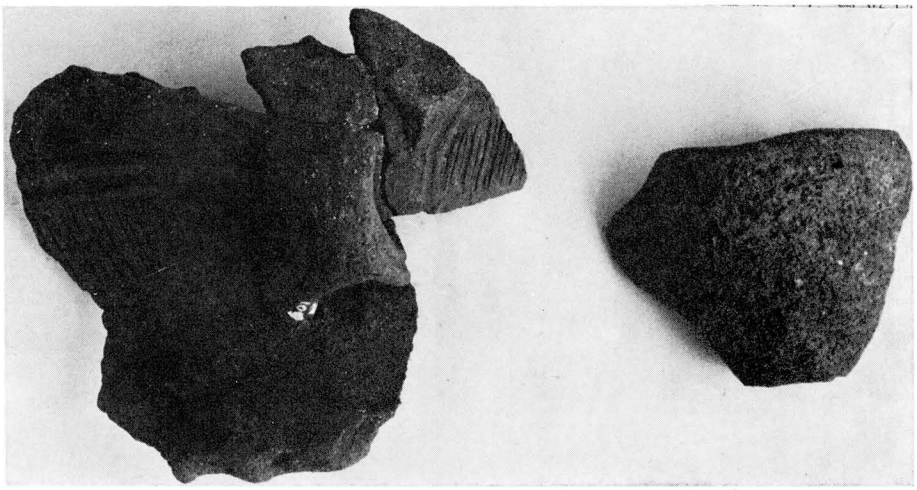
図版Ⅵ

691地点

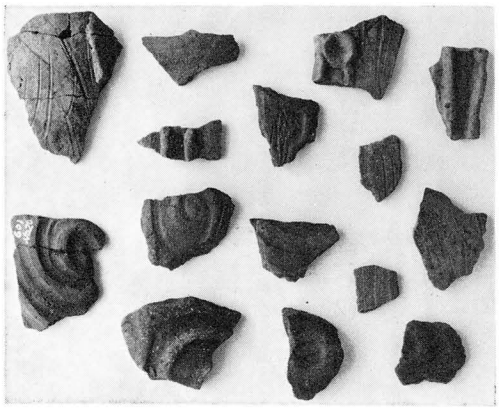
691地点

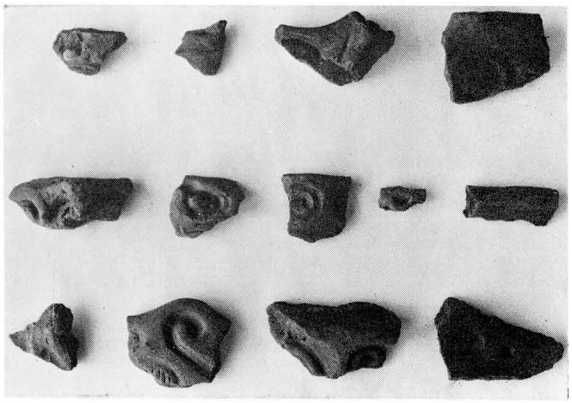
グリッド

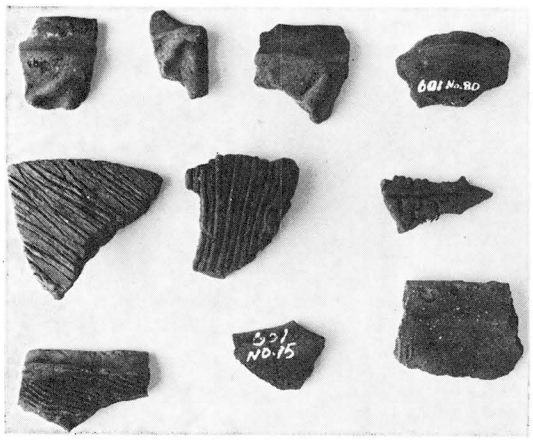


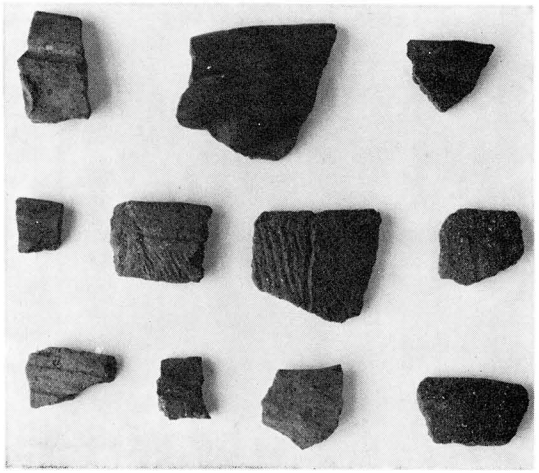


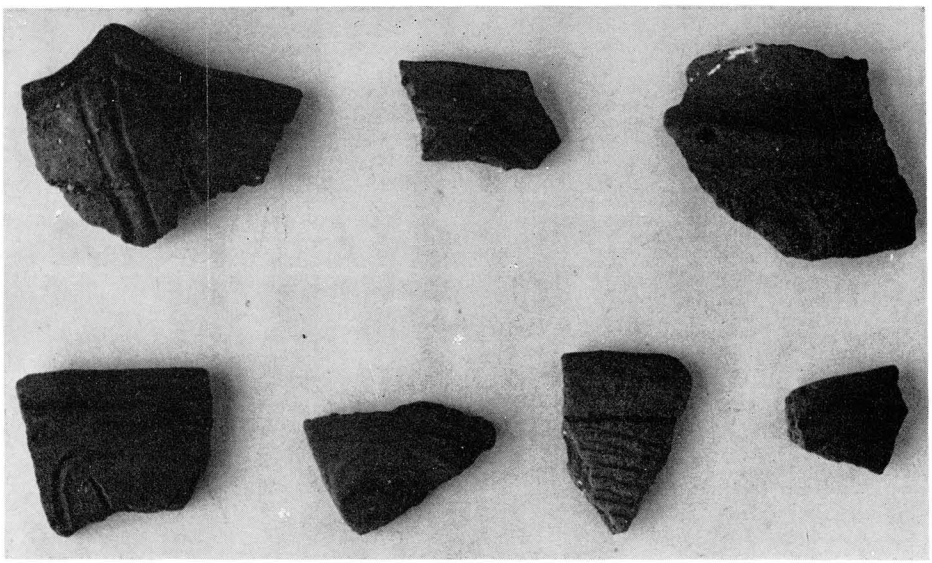
601 地点出土土器



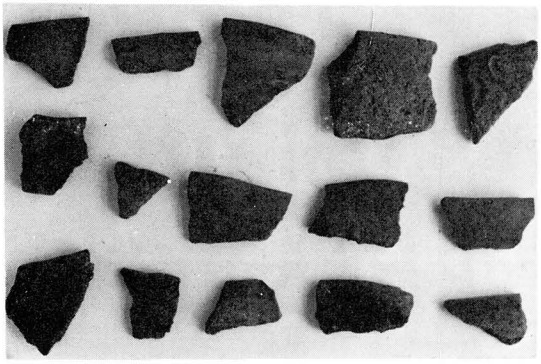


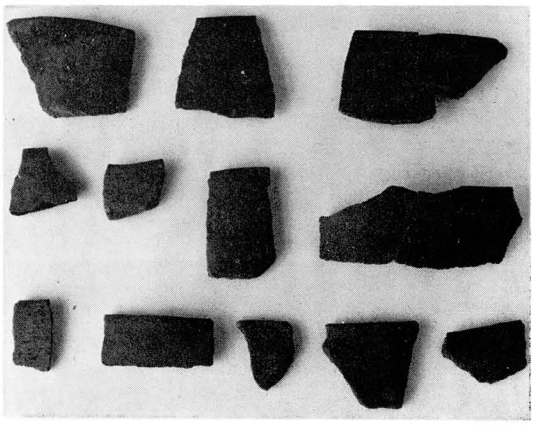


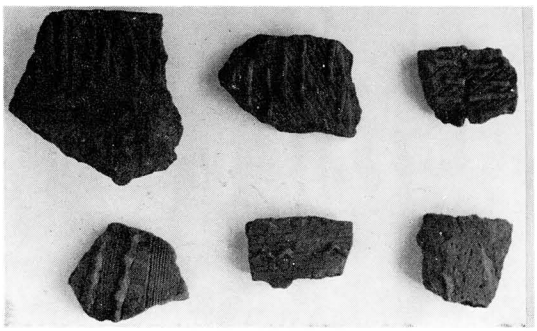


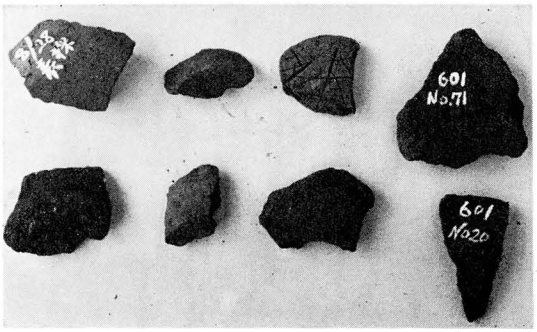


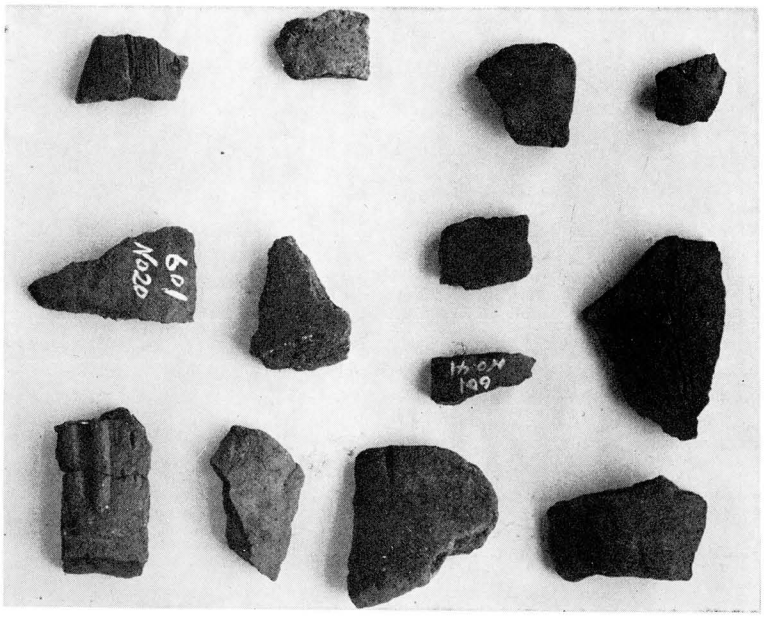
601 地 点 出 土 土 器



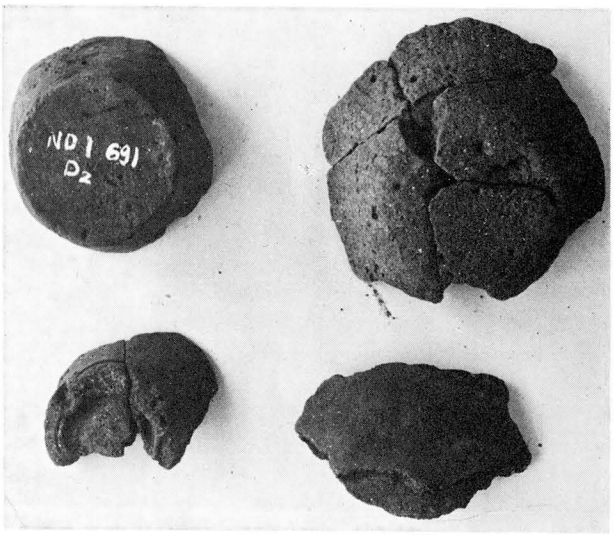




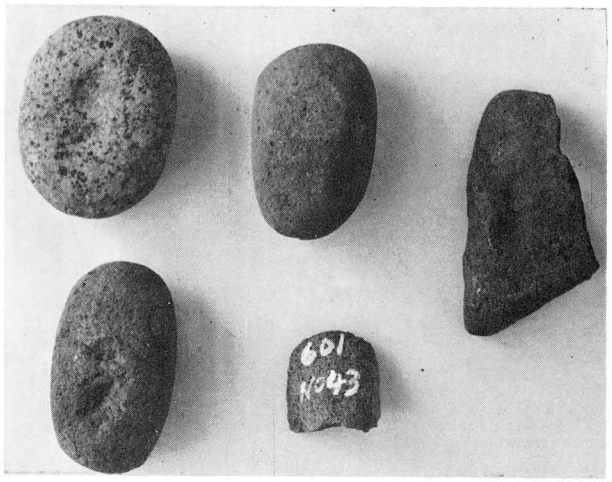


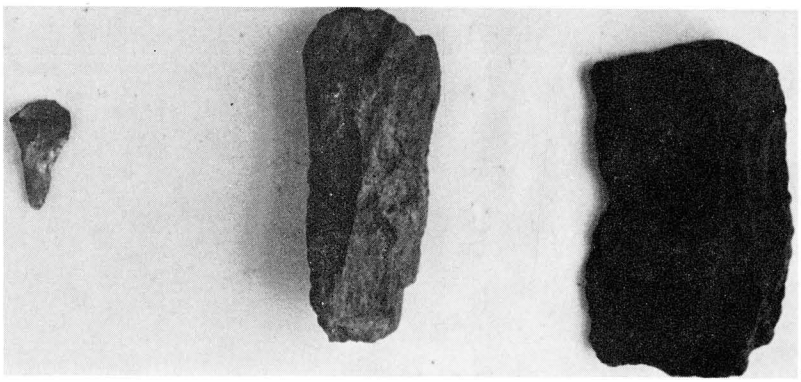


601 地 点 出 土 土 器



691 地点出土土器





601 地点出土土器

昭和44年３月１日　印刷
昭和44年３月10日　発行

編・発行　山梨大学教育学部歴史学教室

印　　刷　株式会社　サンニチ印刷